

長野県東筑摩郡波田村麻神遺跡
第2次緊急発掘調査報告書

長野県東筑摩郡波田町教育委員会

1973' 3

長野県中信農業水利改良事務所
長野県東筑摩郡波田村教育委員会

長野県東筑摩郡波田村麻神遺跡
第2次緊急発掘調査報告書

1973' 3

長野県中信農業水利改良事務所
長野県東筑摩郡波田村教育委員会

序 文

関東農政局中信平農業水利事業所が実施した農業水利事業に伴なって、麻神地籍の埋蔵文化財の緊急発掘調査を実施したのが、昨年の9月であります。

あの遠い祖先の人々の鼓動に触れた感激から、約1年を経たのであります。この度長野県中信農業水利改良事務所によって行なわれる県営園場整備事業、波田地区下波田工区事業として、昨年の発掘地に接続した麻神地籍の土地改良事業が実施されることになったのであります。

この地籍も昨年の発掘調査を実施した地盤に隣接しておって、埋蔵文化財の包蔵地区であったため、長野県教育委員会の御指導と、長野県中信農業水利改良事務所からの依頼によりまして、波田村教育委員会が緊急発掘調査を実施することになりました。

調査団の先生方は、団長は昨年と同様長野県文化財専門委員、松本深志高等学校教諭藤沢宗平先生をお願いし、先生の御推薦によって議員14名の先生方に委嘱申しあげ、調査団の先生方の陣頭指揮の下に8月1日から発掘調査を開始いたしました。

丁度農繁期にて多忙の中を、村民を中心とする各位の協力と、調査団の先生方の指導に基づく各学校のクラブ員の協力によって、8月10日までに発掘と遺物洗浄の作業を終了したのであります。

出土品も前回と隣接した地域でしたが、前回に見られなかった珍らしい壺その他数多くの収穫があったことについては、調査団の先生方や、御協力下さった関係各位の御骨折りの贈物と、感謝いたしております。

その後調査団の先生方のお骨折りによりまして、遺物の復元や調査結果の整理等がなされ、ここに見事な報告書が出来上りましたことは、誠に喜びにたえない所でございます。

私共は、この報告書によって明らかにされた古い時代の祖先の業績をしのび、郷土の歴史文化等の理解を探めると共に、将来の文化の向上発展を期したいと考えるのであります。

ここに、長野県中信農業水利改良事務所、調査団の各先生、県教育委員会並びに関係各位に対し、深甚なる感謝を申し上げ、序文といたします。

昭和48年1月20日

波田村長 太田徳雄

例　　言

- 1 本書は長野県営圃場整備事業並びに波田地区下波田工区事業として土地改良事業の実施により、昨年発掘調査した東筑摩郡波田村麻神遺跡に隣接する同地区的緊急発掘の報告書である。
- 2 本書は藤沢宗平氏指導のもとに、調査員が分担執筆したが、その後、藤沢氏病気入院加療のため同氏の依頼を受け山田・神沢・倉科・中島が原稿・図版・挿図の整理作業に従った。
- 3 図版・挿図の作製は調査員全員が担当した。
- 4 本遺跡出土品は、全て波田村教育委員会の責任において保管されている。

本文目次

序文	波田村長 太田 徳雄	1
例言		2
本文目次		3
図版目次		5
挿図目次		6
第1章 調査		7
第1節 発掘調査に至るまでの経過	鈴田 芳郎	7
第2節 調査日誌	藤沢 宗平	9
第2章 遺跡		13
第1節 遺跡の環境		13
1. 遺跡周辺の自然環境	森 義直	13
2. 周辺遺跡との関連	山田 瑞穂	15
第2節 遺構		18
1. 第2, 第3地区の発掘調査		18
(1) 第2地区 A 1~7, B 4~11	小松 康	18
(2) 第2地区 B 12~17, C 12~17	神沢 昌二郎	22
(3) 第2地区 D 12~17, E 12~18	倉科 明正	24
(4) 第2, 第3地区の中間地区	中島 豊晴	24
(5) 第3地区	森崎 健一郎	25
2. 繩文式住居址	山田 瑞穂	26
第3章 遺物		30
第1節 繩文式遺物		30
1. 土器	神沢 昌二郎 大久保 知巳	30

2, 石器.....	榎崎 健一郎	50
	中島 豊晴	
3, 土器・石器の材質について.....	森 義直	61
4, 土整品・石整品.....	大久保 邦彦	62
5, 自然遺物.....	平林 潤郎	64
第2節 蒼生式遺物.....		66
1, 土器.....	神沢 昌二郎	66
 第4章 結語.....	藤沢 宗平	68

図 版 目 次

図版第1	発掘風景.....	76
図版第2	遺物出土状況（その1）.....	77
図版第3	遺物出土状況（その2）.....	78
図版第4	遺物出土状況（その3）.....	79
図版第5	遺物出土状況（その4）.....	80
図版第6	遺物出土状況（その5）.....	81
図版第7	遺物出土状況（その6）.....	82
図版第8	遺構（その1）.....	83
図版第9	遺構（その2）.....	84
図版第10	遺構（その3）.....	85
図版第11	遺構（その4）.....	86
図版第12	縄文式土器（その1）.....	87
図版第13	縄文式土器（その2）.....	88
図版第14	縄文式土器（その3）.....	89
図版第15	縄文式土器（その4）.....	90
図版第16	縄文式土器（その5）.....	91
図版第17	縄文式土器（その6）.....	92
図版第18	縄文式土器（その7）.....	93
図版第19	縄文式土器（その8）.....	94
図版第20	縄文式土器（その9）.....	95
図版第21	縄文式土器（その10）.....	96
図版第22	縄文式土器及び弥生式土器（その11）.....	97
図版第23	石器（その1）.....	98
図版第24	石器（その2）.....	99
図版第25	土製品及び石製品.....	100
図版第26	水ならの実炭化物（4倍大）.....	101

挿 図 目 次

第1図 第2・3地区遺跡全体図	20, 21の間へ挿入
第2図 遺跡付近の平均的な地層及び遺跡柱状図	14
第3図 波田村遺跡分布図	16
第4図 第2地区、穴状遺構実測図	20
第5図 第2地区A 1~7断面図	18
第6図 第2地区B 8~17断面図	22
第7図 G56における層位	26
第8図 第2地区縄文式住居址実測図	26, 27の間へ挿入
第9図 縄文式土器実測図	31
第10図 縄文式土器拓影	32
第11図 縄文式土器拓影	33
第12図 縄文式土器実測図	36
第13図 縄文式土器実測図	37
第14図 縄文式土器実測図	38
第15図 縄文式土器実測図	39
第16図 縄文式土器拓影	40
第17図 縄文式土器拓影	41
第18図 縄文式土器拓影	44
第19図 縄文式土器拓影	49
第20図 石器実測図	51
第21図 石器実測図	53
第22図 石斧実測図（その1）	54
第23図 石斧実測図（その2）	55
第24・25図 凹石実測図（その1・2）	56・57
第26図 凹石実測図（その3）	58
第27図 磨石・石棒・砥石実測図	59
第28図 石皿実測図	60
第29図 縄文式土器断面拡大図	62
第30図 土製品、石製品実測図	19
第31図 弧形土器拓影	66

第1章 調査

第1節 発掘調査に至るまでの経過

農業の合理的經營が考えられ、その施策が打ち出されてから既に久しいが、波田村においても、広大な波田開田地区の県営國場整備事業に引続いて、隣接地区で、下波田部落の東側に当る黒川開田の國場整備事業が、県営として実施されることになった。

この約30haの工区地域内西南角に、前回発掘調査を実施した麻神地籍がある。この地籍は既に水田化され、遺跡が破壊された部分と、畑地として遺跡が保存されている部分とがあるが、この畑として遺跡が保存されている部分で水田化される（遺跡が破壊されるおそれのある）部分について、長野県教育委員会の指導と、長野県中信農業水利改良事務所からの委託をうけて、第2次の発掘調査を実施することとなった。

調査団長には前回と同様に、長野県文化財専門委員で、松本茂志高等学校教諭の藤沢宗平先生をお願いし、藤沢先生のお骨折りによって議員14名の先生方の御参加を頂いて、調査団を編成した。

調査団の先生方には、夫々本業及び他の調査等仕事をお持ちの、極めて多忙の中で発掘調査から報告書の原稿執筆まで、大変な御無理をお願いした訳で、この御苦労に対しては心から感謝申し上げたい。

事務局は教育委員会の下に、教育長を事務局長とする3名で編成した。尚現局主任の小林君は立命館大学2年生で、丁度休暇帰省中の所を無理にお願いしたが、馴れない仕事を大変努力なさって、良くやって下さったことを附記したい。

発掘調査のための組織は、次のとおりである。

記

波田村文化財調査会組織

顧問	波田村長	太田徳雄
タ	波田村議会議長	川澄聰雄
タ	波田村助役	平林万鬼雄
会長	教育委員長	大月英夫
副会長	委員長代理	深沢清靖

委 員 教 育 委 員	中 斧 正 吉
タ ウ	種 口 豊 子
タ ウ 教 育 長 事 務 局 長	鎌 田 芳 郎
事 務 局 会 計 主 任 教 育 委 員 会 主 事	床 尾 政 尚
タ ウ 現 場 主 任	小 林 巧

調 査 团 組 織

團 長	長野県文化財専門委員	藤 沢 宗 平
副 團 長	穂高高等学校教諭	中 島 豊 靖
発 握 主 任	南安曇郡那須高南小学校教諭	山 田 瑞 雄
調 査 員	松本市日本民族資料館主事	小 松 虔
タ ウ	長野県史刊行会参与	倉 科 明 正
タ ウ	大町市常盤小学校教諭	篠崎 健 一 郎
タ ウ	国 鉄 職 員	大 久 保 知 巳
タ ウ	北安曇郡松川村役場職員	平 林 利 郎
タ ウ	松 本 市 職 員	神 沢 昌 二 郎
タ ウ	豊 科 建設事務所職員	大 久 保 邦 彦
タ ウ	松 本 織 ヶ 頃 高 等 学 校 教 諭	森 義 直
タ ウ	松 本 織 ヶ 丘 高 等 学 校 教 諭	波 多 腰 秀 吾
タ ウ		松 島 功 幸
タ ウ	松 商 学 國 商 高 等 学 校 教 諭	市 沢 正 大

第2節 調査日誌

7月31日 (晴)

午後1時から、役場応接室で打ち合せを行う。

村教育委員会側から鎌田芳郎教育長・床尾取尚主事・事務局担当の小林巧君、調査団側から中島豊晴・山田瑞穂・藤沢宗平の各氏出席。一応の打ち合せをすませた後、現地に、将来、東西に開く予定の4mの道路の一部にAトレンチ、その北側にBトレンチを設定。この地点を第2地点のろとして(昨年の調査地点を第2地点のVJとする)、その東の桃畠・アスパラガス畠の東のアカザの茂る焼地を第3地点として、ここに、全面的にグリット設定を計画。

なお、明日の発掘調査前にアカザなどを刈取ることを決定。

8月1日

何らの行事なく、直ちに発掘調査開始。調査委員は殆んど全員揃ったが、村の人達の参加が賑繁のためか少なく、加えて暑さもあって作業は余り進まない。

第2地点のろ

Aトレンチは7区に分ち(A1~A7グリットと呼ぶ)、Bトレンチは17区に分つ(B1~B17グリットと呼ぶ)。遺物の出土状態は、A、B両トレンチからは縄文中期末の加曾利B式に比定されるものが出土したが、B5からは縄文土器の外に弥生土器が若干発見された。石器では、凹石(11ヶ)・打石斧(6ヶ)が多く、石器・磨石斧・磨石・石皿など1~2ヶの出土があった。なお、B10から焼土が少露わられた。

第3地点

生い茂るアカザを刈り取るのに時間を要し、B~Jトレンチ(B51~J51~B65~J65グリットと呼ぶ)を設定するのに多くの時間を割かねばならなかつた。仕方なく、一方ではグリット設定に、他方では午後からB52~54~56・C51~53~55の6グリットに発掘を始めた。遺物の出土状態は、黒土層ないし黒褐色土層に加曾利B式土器10数片を散在的に発見したに過ぎなかつた。

午後3時調査を打ち切り、村公民館で村教委員と調査団側との全体的な打ち合せ会をもつ。

8月2日

第2地点のろ

昨日調査をはじめたA・B両トレンチに加え午後からC~E各トレンチを設定する。ベルトコンベア入るも調子が悪い。

この地点の地層は、紺土・黒色土・黒褐色土。褐色土とつづくが、層と層の境目はかなり波を打ち、A 2～A 6、B 3～B 7は、黒色土と褐色土がいれかわり層序の乱れを示していた。遺物の出土状態は、殆んど、加曾利E式土器で他の形式のものは認められない。しかも、加曾利E式の後半のようである。石器は、打石斧（14ヶ）、凹石（11ヶ）が多く石皿・磨石・石鏃など各1ヶとなっている。

第3地点

F55に溝状遺構を検出する。遺物の出土状態は極めて少ない。

8月3日

第2地点のろ

西側（A 3～7・B 4～7）、地表下40cm付近に遺物が多いので当時の生活面を想定し、住居の遺構を探ぐるも核心が揺めない。東側も（B 12以東）、B 12付近は黒色土・黒褐色土が深く、遺構の存在が考えられ、B 16付近は中期初頭形式、腰坂式、加曾利E式土器などが「土器だまり」らしい状態で発見される。なお、中間地帯（B 8・9）では幾つかの凹穴と配石遺構が露された。遺物の出土状態では、加曾利E式土器の出土が目立ち、石器の出土状態も凹石（15ヶ）・打石斧（11ヶ）が最も多く石皿（4ヶ）・石鏃（3ヶ）がこれにつづき、磨石斧・磨石・石棒（各1ヶ）の出土もある。なお、土器品に土鈴・土整円盤（各1ヶ）がある。

第3地区

昨日検出の溝状遺構を講義グリットに追求するも、長い不整形の不恰好なプランとなる。遺物の出土状態もなく、石器は僅かに打石斧1点のみであった。

8月4日

第2地点のろ

作業は西側と東側に分かれて行われ、前者では地表下40cmレベルの遺物出土状況を実測し、加曾利E式の新しいもの、中期弥生土器の古いものなど検出。後者ではC・Dトレーナーの上層から加曾利E式の新しいものを検出し、石器では相変わらず打石斧（22ヶ）と凹石（2ヶ）が続いている。

中間地点

第2地点のろと第3地点の中間の桃畑とアスパラガス栽培地を中心とした地帯と呼んで、Cトレーナーを中心にグリットを設置し、C21・24・27の3地点を発掘する。

第3地点

溝状遺構の性格のわからぬままに整理に入る。なお、C55の地層のセクションをとるために掘り下げる。本日は、午前10時頃かなりの降雨になったため、発掘を中止して中学校

で土器洗いをしたが、正午近くから再び調査開始。

昼食休みの間に調査委員会を開き執筆のことなど話し合った。

8月5日

第2地点のろ

西側、地表下50cm位遡ると、なお、遺物は出るが、褐色土層に近くなると少なくなるらしい。土器は加曾利E式の新しいもの。東側、加曾利E式に勝坂式が混り、その傾向は、特に、B・Cの16・17付近に多い。石器は凹石（25ヶ）、打石斧（22ヶ）が最も多く、磨石・石鏃・磨石斧がつづく。

第3地点

測量開始。

8月6日

第2地点のろ

西側、中期末土器が出土し、ローム質土壤が斑点状に褐色土のなかに出るが、両者を区別して遺構となるような箇所はない。しかし、A4地表下65cmに焼土が露われる。午後になって、ピット状に落ち込む箇所があるらしく、A4では地表下60cmに、A5・6では65cmに土壤の色の違う部分があり、その部分の土を除く作業に入る。B6から翡翠製の扇飾品が発見される。

東側、B12付近の堅穴らしいものを追求するためC・Dにわたり除土。C13・14とD14の境付近に埋蔵らしいもの現われる。午後になってB、Cの15～17付近に第2号住居址らしいものが現われ、第1号住居より出土遺物は古く、勝坂式が混じっているらしい。E・Dの12～17では第3号住居の存在が認められる。

中間地点

C24・D24グリットを埋るも新しい知見なし。

8月7日

第2地点のろ

西側、堅穴住居に伴う幾つもピット出土。焼土も幾つかあるが炉址ではないらしい。

東側、ベルトコンベア故障し、午前中2時間も停止、大打撃。結局、第1号住居址は、B・Cの13～15に現われ、第2号址はこれに切られている。第3号址の南に第4号址が現われ、両者が埋蔵の存在が確認される。

なお、この日の終わりに、第5号住居址が現われ、狭い地点に第1～第5号住居址の存在が確立され、さらに、第5・第3号址に接して第6号住居址の存在を示すと思われる土色の変化をみる。

8月8日

西側ピットは測量に入り、東側の住居群は一日延長して残りの部分の発掘をつづける。午後、太田徳雄村長、大月英夫教育委員長、村議会社会文教委員長上条正喜氏、波田病院長栗崎純氏ら見学。昼食時に有線で調査中の旨を流したので、村民の方達も多く見学に見えた。

その後、第5号址でも埋甕を発見し、計3ヶの埋甕を堀り上げる。なお、第3号址の伏甕は、堀り上げてみると、勝坂式には繩な竪形土器となり、率の意外に驚く。

この日は、村の婦人の方を中心に、中学校で土器の水洗いをする。

8月9日

一部の人達で現地の商販実施。

(藤沢宗平)

写真は遺跡を西南より見た遠景 ○印発掘地点テント



第2章 遺 跡

第1節 遺跡の環境

1. 遺跡周辺の自然環境 (第2図)

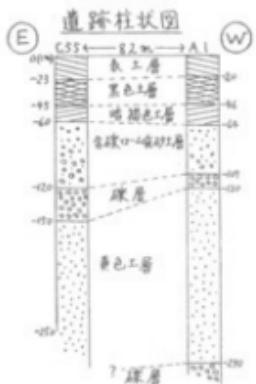
本遺跡は、松本平の西南にある前山、1773mに源を発する唐沢川により作られた扇状地にあり、西は、西端の山際から、波田村側を流れる小流と、東端の山際から、山形村に流れている唐沢川の2つの流れがあり、遺跡は、そのほぼ中央部にある。遺跡は海抜710m～720mの所に分布し、遺物包含層は、上から、表土、黒色土、暗褐色土、褐色土、と続く土層中の、暗褐色土中に、層をなして存在しており、その上の、黒色土中からも、2次的堆積と見られる遺物が出土している。ここで、当時の自然環境を復原してみると、表土と黒色土は、まだなく、西側の小流は、今と大差ない所に存在していたが、この扇状地を作った、主河川である唐沢川の東西の、首振運動のうち、疊層の傾斜から、最後の首振りが、西から東であったことがわかり、これにより、遺跡の南側、程遠からぬ地点を、唐沢川が、流れていたと推定される。

河川堆積物である褐色土の上に、当時の、生活面を含む暗褐色土が、

- ①降水、および、豪雨時に多発する小流で表土が、扇状地上を移動する。
- ②風（特に南西風）により、表土が移動する。
- ③火山の降灰



第2図の(1)



などが鬱らきて、堆積し始めており、そこが、当時の生活舞台で、その暗褐色土から、下の褐色土層まで、堅穴を掘って、住居としていた。暗褐色土中にも、同一地点で、上下に、二面程の生活面が見られる所もあり、ほぼ暗褐色土の堆積期間中、この地の縄文人の生活が続くが、その上の、黒色土中には、遺物は存在するが、確かな生活面は見られず、①による二次的堆積物と見られる弥生初期の遺構は未発見であるが、二次的堆積物の破片から推定すると、黒色土の下部付近と考えられる。

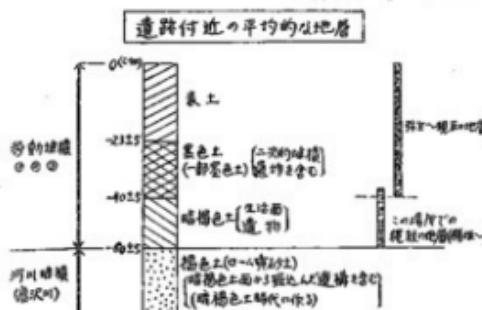
当時の植生は、広葉落葉樹林に、松など針葉樹が混生し、土壤の酸性が強いところから、川辺には広く、アシなどが茂り、層なお暗い大森林は、考えられず、明るく開けた森林と禾本科植物の原野が、当時の姿であったようだ。

次に、褐色土以上の、土層の色の違いは、植生の違いによるとみられるので、色の異なる土層の境目を、更に、くわしく観察すると、褐色土と暗褐色土は漸移し、暗褐色土と黒色土とは、割合はっきりと移り変っている。

黒色土の中の炭質物の量も変化しており、多い所は、黒色をなしている。

顕微鏡的には、表土、黒色土、暗褐色土は、いずれもよく似ておらず、石英粒と粘土からなる。黒色土中には、特に有機物が多く入っている。その下部の褐色土は、ロームに近いが、流水の作用を受け、洗われており、酸化が進み、小礫を含んでいる。褐色土以下は、

第2図の(2)



礫、砂、共に、唐沢川によるものである。結局、この扇状地上面にあった褐色土が、河川によらず、主として、前述した①②により、移動堆積したもののが、暗褐色土、褐色土表土である。結論として、褐色土以下は、唐沢川により暗褐色土以上は、①～④により堆積したものと考えられる。

そこで、暗褐色土～表土までは、近似した地質状態であるので、その厚さは、時間の長さに、ほぼ、比例するものとみられ、今、弥生初期を遺物から黒色土下部と推定すれば、現在まで、約2000年間に表土まで、40cm±5cm堆積したことになり、その下の暗褐色土（縄文の生活面のある層）の厚さは、15cm±5cmであるので、上部より圧縮されているとはいえる、堆積の上からのみいえば、2000年を越えることは、あり得ないことになる。（弥生初期の生活面が見つかれば、かなり、はっきり絶対年代がわかる）

逆に、遺物の埋没、堆積原因については、

- A. 前述①により、他から移動して堆積したもの
- B. 遺構、遺物が、放置され、その上に①②③により、土砂が堆積したもの
- C. 遺構、遺物が、急速に埋没したもの

A. B. C. の、いずれも存在し、特にCがはっきりしたのは、土器覆りと、隕石の軌跡の測定状況について、注意して調べたところ、拳大くらいの褐色土（下）が、暗褐色土（上）と、はっきり、斑状になって堆積しており、もし、放置して堆積したものならば、この場所での立地条件では、はっきりした、斑状を示すことは、決してなく、暗褐色土、もしくは、混成土と、なっているはずである。このことは、急速に埋没されたことを示しており、黒色土が、全然見られないことから、縄文の或る時に、人為的に、埋められたことを物語る。しかも、土器覆りで見る限り、勝坂式と加曾利B式との間には、堆積上の上下関係は見られず、時間的な、すれ、を認め得なかった。

（森 義直）

2. 周辺遺跡との関連 (第3図)

第1次の調査報告書に神沢が、周辺遺跡についてのタイトルで述べているので重複するが了解されたい。

第3図 波田村道路分布図



麻神遺跡の立地する松本平西方には、鏡川、唐沢川、梓川、黒沢川等が流れて扇状地形を形成している。これら河川にそった扇状地には各所に縄文期の遺跡が分布し、特に河川が山地から平地へ接続する地域にそれが濃厚である。波田村の遺跡は、梓川と唐沢川に沿った地域にその多くが存在し、現在約40箇所の縄文期のものが知られている。これらの遺跡は生活そのものに二川の水は使わなかっただろうが、生活全般にわたっては大きな役割りを有していたに違いない。

約40箇所の縄文期の遺跡が存在していても、発掘調査等での内容が明確なものは、荒原遺跡と本遺跡のみである。これは波田村に限ったことでなく、山形、朝日村等西部山麓地域は同様のことがいえ、未調査地域と言える。この西部山麓地域で発掘調査等での内容が知られたのは、熊久保、洞、唐沢、三夜塚の各遺跡で波田村のそれを加えても十指に満たない。今後の調査に待つところが大であるが、今までの分布調査等を含めて全体をみた時、いくつかの特徴的なこと、共通的なこと等、問題点が挙げられる。

一つはこの地域に縄文早期の遺跡が見当らないことである。梓川を渡った対岸である梓川村には朝鮮原遺跡や更に北上した黒沢川流域の室山西方に猪円文、山形文の押型文土器出土があるのに、未調査地域とはいえ、その出土をみないと注目すべきことがある。その二に縄文前期になると遺跡数は増し、淀の内、唐沢、寺山、下島、菱野里ヶ丘と分布するが住居址の確認を得て内容の知られたのは唐沢遺跡だけである。とにかくこの地域では他の地域に比し、一步おくれて縄文文化が始まったと見られよう。

第三に挙げられることは、縄文中期になるやその様相を一変して爆發的に遺跡数が増加することである。この現象はこの地域に限ったことではないが、本遺跡もその一つの存在であり、内容的には、三夜塚、洞、荒原の遺跡に類似点を有するところが多い。即ち、中期の住居址が重複しあうこと、住居址内床面下に正位ないし逆位に土器を埋める埋葬習俗のあったこと、普遍的な石器の出土をみると、廻塗後の住居に「吹上パターン」と称すべき土器の埋葬があること等である。しかし、共通的な姿相は示すが個々の内容では、そこに若干の特異例を見ることもまた事実である。例えば、本遺跡では、凹石の出土量が他に比べて多いこと、埋葬も正位と逆位があるが、伏せ壺とも称すべき逆位に壺を床面下へ埋めたものもあること等である。

第四に縄文中期に急増した遺跡もその後減少していくことは、本地域でも同様に言えることであるが、連続して、中期、後期、晩期、弥生の遺物を有する遺跡はそう多くない。

以上、本遺跡を中心とした周辺遺跡との関連を概観したが、中期の共通的内容を持つつ特異例を有することや、中期～弥生にまで及ぶ遺物の出土をみると、周辺遺跡の中でも本遺跡は貴重なものである。

(山田瑞穂)

第2節 遺構

1. 第2, 第3地区の発掘調査

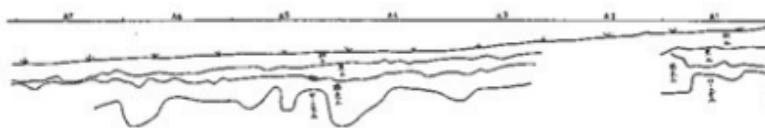
(1) 第2地区 A1~7, B4~11 (図版8, 9, 10・第5図)

第2地区は前回調査された第II地点の直ぐ東側となり、前回調査の時から表面採集される縄文中期の土器片や、耕作者の話により遺構の在ることが予想されていた。第2地区は今回調査される地域の西端であり、グリット番号は最初になり、1~7迄のA, Bのグリットについてである。グリットは昨年調査の第II地点に境を接して2m×2mに区切られて設定され、こゝに報告するのは7グリット迄のA, B合せて、12グリットの範囲である。(図版8・9)

調査地域の遺物を出土する層位は、第1層になる耕土の15cm~30cmにはあまり無く、第2層の黒土の5cm~30cmの下部から第3層の暗褐色土、10cm~40cmの上面にかけ多く、第3層中も下部になると少くなく、最下層のローム状の中には遺物は認められなかった。

(第5図)

第5図 第2地区A1~7断面図



各グリットの遺物の出土状況については、(図版8) A1からは少量の縄文中期土器が出土したのみである。A2からは磨石斧が地表下50cmより1点出土し、他に縄文中期破片が発見された。A3からは凹石が地表下80cmより1点出土し、他の地点の同深さから石皿が1点出土し、他に縄文中期末の土器片が出土している。A4からは地表下80cmより横基1点、100cmより黒羅石製石鎌1点が出土し、他に縄文中期末の土器片が出土している。A5からは縄文中、後期の土器片の外、地表下45cm、暗褐色土層上部に弥生土器の破片が出土した。A6からは地表下35cm、40cm打石斧各1点、同35cmより黒羅石製石鎌1点が出土し、他に縄文中期末土器片が出土している。

B4からは縄文中期末の土器片が出土したのみで石器の出土はなかった。B5からは地表下40cmから打石斧1点、他に弥生式土器片が地表下50cmの褐色土層から出土し、周辺から縄文中期末の土器片の出土があった。B6からは地表下35cmより打石斧1点、他に縄文中期末の土器片が出土している。B7からは地表下40cmと41cmから打石斧が各1点、40cm

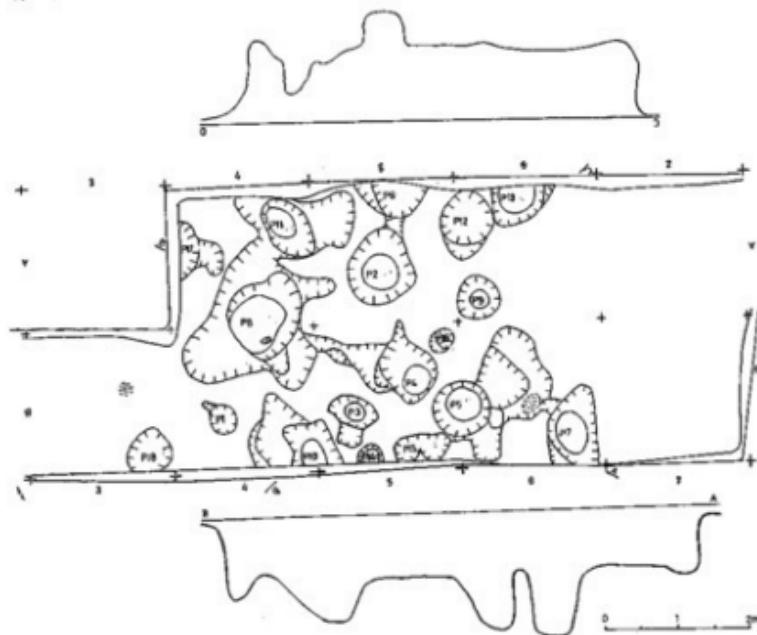
第30圖 土製品、石製品実測図



から凹石が1点出土し、他に縄文中期末の土器片や把手の部分も出土している。B 8は耕土が除土されたのみで掘り下げがなされず、遺物にもみるべきものがない。B 9は中位の自然石が点在し、縄文中期末の土器も地表下40cm付近の層位から出土したが目立ったものはなかった。

他の土製品については、(第30図) B 4のP 8,-115cm中央より縄文中期末の土偶頭部が1点出土した。ローム状の土層面よりは30cm程深いピットの中で、このピットは第4回でみると不整形の径が120cm~2mあり、深さも90cmあり、伴出遺物としては縄文中期の土器片が上部からは出ているが下部は出土遺物は無かった。

第4図

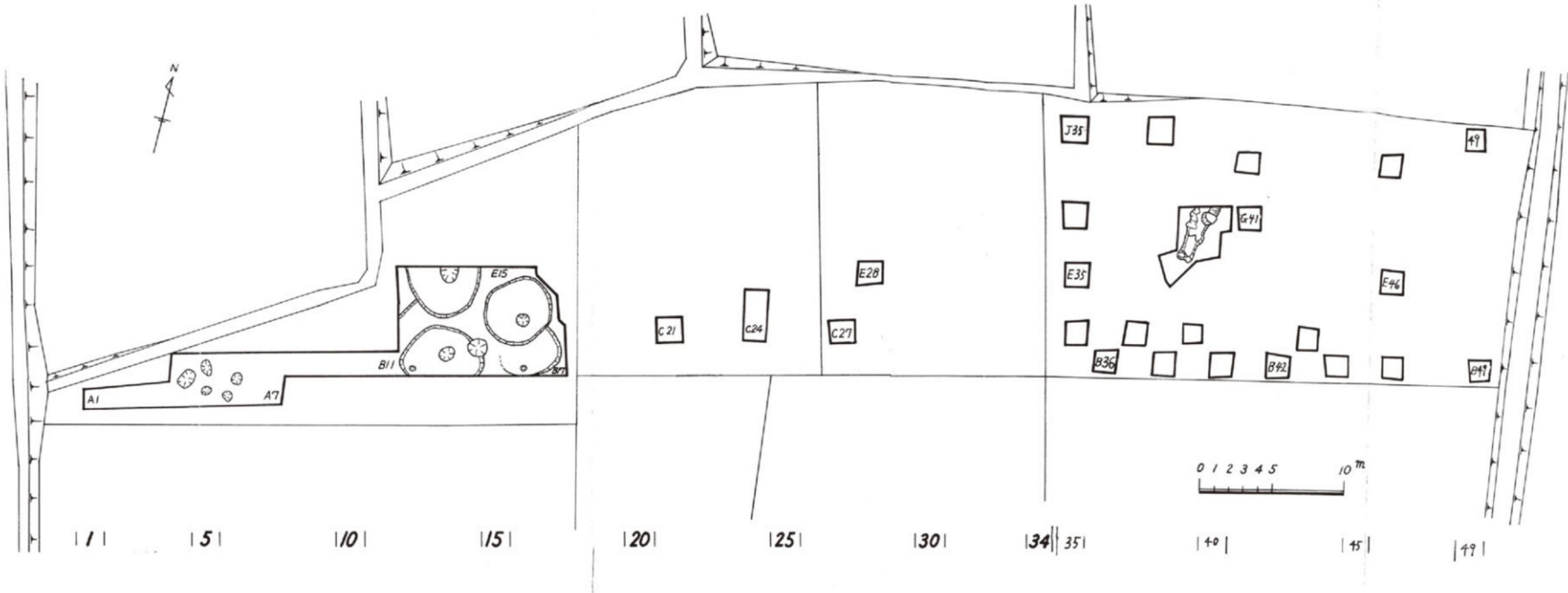


B 7,-75cmよりは鹿の角玉(第30図)が発見されたが、上層の一40cm付近は打製石斧凹石等が出土したが飾玉の出土した付近は縄文土器もありなく、単独出土であった。

その焼土については(図版10, 上) A 4~A 5の境の中ほどに焼土があり、層位は一60cmで10cm位の厚さに焼けている。焼けている範囲は104cm×60cmである。

A 4の南側ほぼ中央に85cm×50cmと北側にも半円に60cm×45cmに焼けており、層位は一65cmである。焼土の厚さは10cm位である。

第1図 第2，3地区遺跡全体図



A 5 の焼土は南北 105cm × 97cm の楕円に焼けており、層位は -60cm である。

A 6 には -65cm に 65cm × 60cm のほぼ円形に焼けてあるところがあり、この中に径 17cm と 19cm の円形に強く焼けた部分があり、他の焼土とは少しあるむきを異にしている。

以上の焼土は土器を取上げた下にあり、層位は褐色土層中である。またこれより下に在ったものとしては A 3 の -90cm 、 A 6 の -70cm が径 15cm ~ 30cm の円形又は楕円に焼けている

さらに、穴状遺構については（図版 9 、第 4 図）穴状遺構は 18 を数えるがその性格について一様でなく径の小さな 1, 14, 16, 3 等は（第 4 図）住居址の柱穴等に關係するかと考えられるが、徑 50cm をこえるものがあり穴の形状も不整形であり、住居の柱穴址等とは違った用途の性格でないかと推定されるが確証は無い。下部には土器片が少なく、上部で焼土や土器片が出土しており、下部の穴状遺構との關係を物語れる三者の出土状況は認められない。A 6 では焼土が穴の端にあり、穴との關係は考えられず、別々であろう。

褐色土中の土器は、焼土面より上に多く、焼土と土器、石器等の關係はよいと考えられるが土器は弥生式のものはかなり大きくまとまるようであるが、縄文式の土器にはかなり破片が出ておりながら完形等になる整體の無い事はどう考えたらよいであろうか。焼土を炉址としても下の穴は柱穴としての位置として出来るものもあり無く、ただ周辺の遺構（恵原、三夜塚）の状況よりして、縄文中期末のこの時期は褐色土層の中に平地式の住居の在ったことは認められる。結論を急げば今回調査も 10 番目のグリットより東には縄文中期の住居址が複合しており、前回調査の西側も縄文中期の遺構があり、その中間地域であり、今回調査された地域だけよりして考えた場合、穴は柱穴らしいものを除いた場合、住居址に關係した以外の場合何であろうか、その一つとして葬祭の場の遺構としての考えは如何であろうか、B 4 の P 8 等は土偶の頭部のみを中より出土し何かを物語っていると考えられる。A 3 の -75cm より径 2cm 程の白い骨片様の物が褐色土中より出土したが、近くの焼土や土器等との關係を考えられる迄には至らなかった。この穴の性格を決定するにはもっと広い発掘面積が必要であろうし、周囲の住居址との關係を見られる広い調査地域の上に立って決定するが一番良いであろう。今回は住居址以外の遺構として注意を喚起し、今後の出土例を持って性格を決定したい。

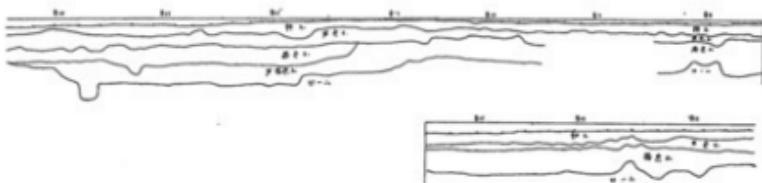
（小松處）

穴状遺構表

グリット 名 称	P番号	P.深さ 0~20	P.深さ 20~50	P.深さ 50~100	P.径 100~50	P.径 50~100	P.径 100~
A 3	18	15	CR	CR	CR	CR	60×65
A 4	1		25		40×40		
タ	10			75		60×120	
タ	11			60		80×140	
タ	8			95			120×200
タ	17	8~11				80×60	
A 5	3			66		70×65	
タ	4			74		65×80	
タ	15		20~27		35×35		
タ	14	17			40×30	の深さ	
タ	16	18			30×40		
A 5~6	5			86	75×160		
A 6	7			65		70×100	
B 5	2			90		90×115	
B 5	6			55	45×90		
B 6	9			70		60×60	
タ	12		43			70×100	
タ	13			60		70×60	

(2) 第2地区 B. 12~17・C 12~17 (図版3, 4, 5・第1図・第6図)

第6図 第2地区 B 8~B 17断面図



本地点は前述のBトレンチ第11区に統いて東へ第17区まで設定されたもので、その北側に平行してCトレンチ第12~第17区がもうけられた。(第1図) 地形は東に緩く傾斜しており南北のレベルは、僅かに北に下る程度である。地層は耕作土(10~30cm)・黒色土(15~40cm)・黒褐色土(20cm~25cm)・褐色土(30cm)・ローム層と続くが、(第6図)一部地層に変化があるので、便宜上三つに区切って記述したい。

第12~第14区、遺物は黒色土層より加曾利E式土器片が出土し、地表下40cm以降の黒褐

色土層では広範囲にわたって遺物の出土をみる。時期的には上層の遺物と同じであるが、一括土器、打製石斧、凹石、石錐のほか、小動物の骨片がかなり目についた。更に70cm以降になると黒褐色土層に黒色が増し、75cmではかなりの広さで炭が混在しており、磨製石斧の出土をみた。105cmの深さでは花崗岩礫とともに直径40cm程の焼土および木炭らしきものの出土を見、土器片も上層と同時期のものその他、勝坂式類似のものおよび、縄文中期終末らしき土器などがかなりまとまって出土したが。(図版3の下) 焼土、遺物の量などより、あるいはここが生活面かとも考えてみたが、南側はトレンチ壁にかかり、その広がりを追求することはできなかつた。掘り下げの結果、黒色を増した土は住居址に落ちこんだものであることがわかり、Bトレンチを中心に石圓炉をもつ第1号住居址、その北側Cトレンチに第2号住居址が重って検出された。層序と出土遺物についてみると加曾利E期の遺物は全層にわたつて検出され、また下部黒色土層より時代の下ると思われる遺物が出土している点など、上下関係はとらえにくい。

第15区 この区でも前述の区と同様であるが、黒褐色土からすぐにローム層に達する。遺物は全層にわたつて、加曾利E式土器・打石斧・凹石・石錐などが出土したが、特にB・Cトレンチにかけてロームの盛り土が地表下45cmであらわれ、その大きさは1.3m×1.1mで、そのままローム層に達していた。この盛り土には遺物はなく、盛り土の下にB14から続く炭の層が入っていることなどから、第1号址のピットを掘りあげた土ではないかと思われる。地表下95~90cmでは磨製石斧が2ヶ出土し、(図版5の上) そのうち1ヶは第3号址の周辺より出土している。

第16・17区、B16では耕作土が15cm、黒色土が15cm、黒褐色土が20cm、褐色土が25cmでローム層に達する。地層はB12~14の落込みの部分をのぞいて、B12~17まで各層とも統一しているので、二次的に動かされたものでないことは確かである。遺物は黒色土層中より出土し、黒褐色土層にいたると、おびただしく土器片が網集している。そのひろがりはB・Cの16:17にまたがり直径約2mの範囲で特に密であった。遺物は重なりあっていて何層とも言えないが、その土器層は50cmあまりにおよぶ。(図版2の上・4の上) このような状態は第1次発掘の折にも発見され、「土器だまり」として報告されているが、第1次発掘調査の場合の勝坂式に類するものが主であつたことに対して、今次の場合加曾利E式に類似するものが主体をしめる。細部についてみると上層、特にC17には、加曾利E後半あるいは同期終末かと思われるものが検出され、下部の方では、勝坂式および加曾利E式前半に比定されるものが多く出土した。また前者では器体の判明するほどのものはなく、後者では、器体の判明するものがなかつた。

(神沢昌二郎)

(3) 第2地区 D 12~17, E 12~18 (図版2, 第1図)

麻神第2地区的発掘は、今回の発掘予定地の南限界線にそって、ほぼ東西に基準のBトレンチ幅2mを設定した。このトレンチ発掘の進行によって、その北側へ部分的にC・D・Eの各トレンチの拡張発掘を行ったものである。Bトレンチはその一部を除きほぼ全体に発掘が進められたところ、12~17区から土器・石器類などの多かったことや、住居址が発見されたことから、この地区を最重要地区として漸次拡張発掘のため Cトレンチ12~17区・Dトレンチ12~17区・更にEトレンチ12~18区（このうち18区は、表土を除去しただけでそれ以下の発掘は進めなかった）

Dトレンチ12~17区・Eトレンチ12~17区においては、表土の厚さは約20cmで、この下に黒土層が20~25cmがあって、この層（-）35cmから（-）45cmにかけて第一の遺物包含層があり、この中から、縄文中期加曇利E式土器片及び打製石斧や凹石類などが相当数発見されている。然し住居址などの遺構が検出されなかった。この下に約50cmの褐色土層がある、この層の（-）50~（-）65cmのところから、打製石斧・磨製石斧・凹石などの石器や加曇利E式の土器片が多く発見されているが、この層にも住居址などの遺構が発見されなかった、この層が第二遺物包含層であった。

第三遺物包含層は、この褐色土層の最下位（-）80~（-）100cmの間にあって第2、第6号住居址（何かの遺構には間違いないが住宅址か否か未確認）直上の文化層であった。この層からは、打製石斧・石器・凹石・加曇利E式土器片・土偶頭部などが次ぎつぎと発見されているが、特にこの層では土器類の出土が多かった。

Dトレンチ12~14区で（-）100cmのところに第2号住居址が発見され、これと切合って、その北側のEトレンチ12~14区に亘って（-）120cmからは、第5号住居址が発見されたが、予定トレンチF12~14区が発掘されなかつたので、その全体を確認することが出来なかつた。またDトレンチ15~17区・Eトレンチ15~17区の（-）120cmからは第3号住居址が発見されてこれは先掘された。Eトレンチ15~16区の北側壁よりには、第6号住居址の一部と思われるものが見つかったが、これは極く一部の住居址でこれも全体を確認することは出来なかつた。

（倉科明正）

(4) 第2, 第3地区の中間地区（第1図）

第2地区においては豊富な遺構及び多量な遺物の出土を見たが、第3地区においては広範囲に総数135グリットを設け、その中で25グリットを発掘した（藤崎氏詳説）のであるが、遺構、遺物面では見るべきものは少なかつた。以上のごとく第2地区と第3地区とは大変様相を異にしている点があるので両地区を結ぶ中間地帯にグリットを設定し、その様相の変化する限界線を探ぐるのを主目的とした。設定した中間地区は収穫直前の桃畑と雜

草密茂するアスパラガス畑内に存し、この畑地区に第2地区のC17を基点としてそのまま一直線に東に延長。第3地区的C51に連結する長さ34mにグリットを設け18~34グリット迄に区切る。重点的に調査を行う目的でこのグリット内の三個所(21, 24, 27)及びこれに併行して隣接するD24, E28を発掘調査する。

C21は桃畑の中に存し第2地区に最も接近した場所。その地層は表土よりローム層に達する迄約61cm、その断面は表土(耕土)15cm、その下に黒色土13cm、続いて黒褐色土17cm、褐色土16cm、最後にローム層に達する。遺物は地表面下20~55cmの間、即ち黒色土層中よりまつぼつ散見され、黒褐色土、褐色土の両層間より勝坂式を含む加曾利E式土器片多数混在し、凹石3個、石鐵1個、黒曜石片若干発見される。土器の出土状態から見ると、耕作により擾乱されている。ローム層中よりの遺物は皆無であった。以上の如くC21は結果的に見れば擾乱されてはいたが、中間地区グリット発掘中では最多量の遺物包含グリットとなつた。C24, D24は桃畑の東端部に位置し、土層位は前述のC21と殆んど同じ。遺物の出土状態も同様であるが、量はC21より少なくなる。土器片は加曾利E式を主とし勝坂式が付随していた。石器類では凹石3個、黒曜石片若干、ローム層中からは遺物皆無。C24, D24のはば中央部のローム層中を巾50cm、-13cm掘下げた溝の南北に走っているのを発見したが、その中よりガラス片の出現を見たので後世の遺構であると判断し追及を中止する。

C27はアカザの茂るアスパラの畑内に存在し、土層位は前述のグリットと同じ。遺物は前者に比すると極めてすくなく加曾利E式土器片数片のみでローム層中には遺構、遺物全く見当らず。E28もアスパラガスの畑地内に存し遺物は地表下25~45cmの間に散在し、加曾利E式土器片7片、誠に微量であった。ローム層には遺構、遺物は見当らなかった。以上の経過より類推されることは、第2地区を境目にして東側は明瞭に遺構、遺物が激減していることが確認される。このことは当時の集落と目される住居址群の外縁部を示す意味を有するものと考えられる。(中島豊晴)

(5) 第3地区 (第1図・第7図)

第3地区といふのは、第2地区の東方に接続する地帯で、設定されたグリットは、B, C, D, E, F, G, H, I, Jの51から65までである。このうち発掘調査されたグリットは

Bの36, 38, 40, 42, 44, 46, 49 Gの35, 39, 40, 41

Cの35, 37, 39, 43 Iの41, 46

Eの35, 38, 39 Jの35, 38, 49

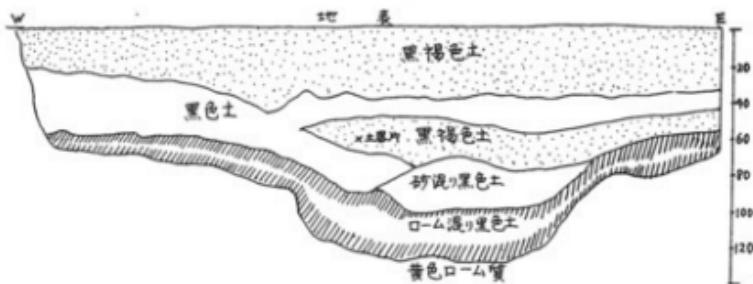
Fの39, 40, 46

である。51番とB列が多いのは、先ずここから着手したためであるが、遺物の出土もきわめて少なく、遺構も見当らないので、遺跡の範囲は第3地区には及ばないことを認め、その上念のため要所要所のグリットについて調査をしたわけである。

地区全体からすると、西部のグリットに僅少の遺物の出土をみたものの、東部に於てはほとんど出土をみなかった。

遺構についてはFの39において黒色土層の落ち込みを認め、この付近Eの38・39Fの40Gの39・40に拡張した結果、北東から南西にのびる溝状遺構となった。この溝は長さ4m幅は南部で1m、北部で2mほど、深さは北端が深くて1.2m、南にゆくにつれて次第に浅くなり消失する。北端はここで終ったのではなく、さらに東方にむかって表土の下をトンネル状に伸びているようである。溝の底は平でなくかなりの凹凸があり、その形も不規則である。

第7図 G56における層位



この溝状遺構の中からは中間の黒褐色土層-45cmに土器片が出土している。

この遺構がどのような性格のものであるかは、俄に断定し難いが、人工のものではなくローム形成当時、自然にできたもので、その後埋没したもののように解せられる。出土した土器片も、その途上に於て落されたもので、はあるまいか。このことは断面(第7図)にみるように層位がかなり乱れていることからも察せられよう。

(深崎健一郎)

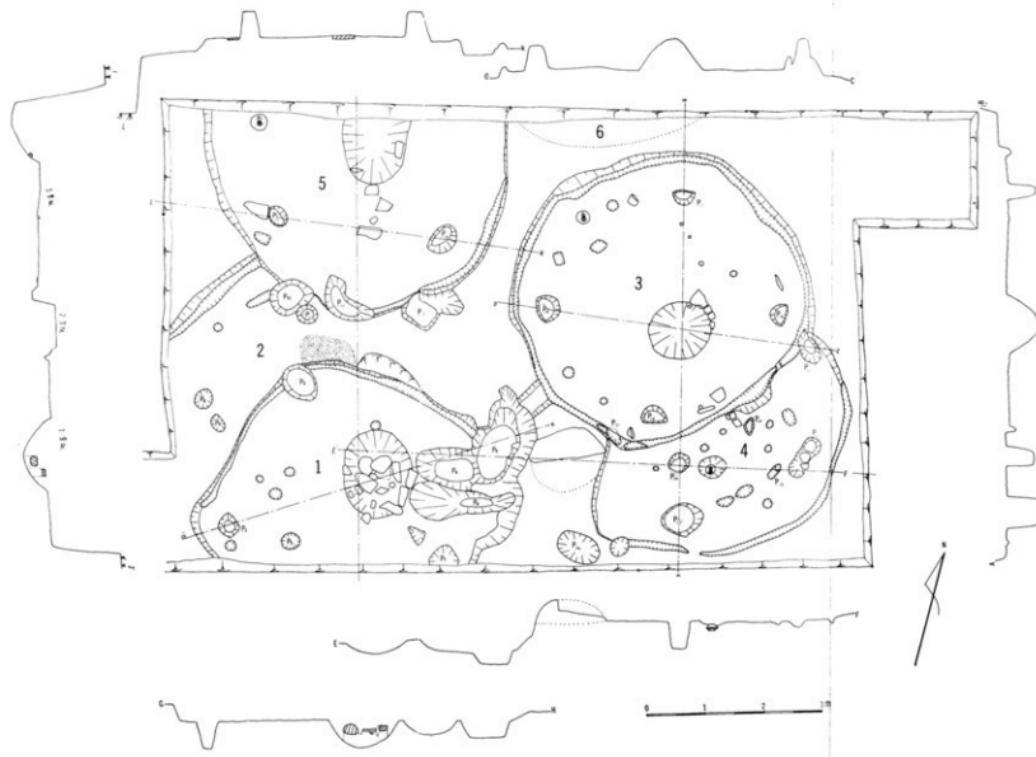
2. 縄文式住居址

第2地点、B、C、D、Eの12~17グリットにかけての95坪の区域内より6戸の竪穴住居址の確認が得られた。

(1) 第1号住居址、(第8図、図版10の下図版11)

本址は、B、Cの12、13、14グリットに確認されたもので、耕作上の都合で南半分は露呈することが出来得なかった。本址の北には第5号址が存在し、共に第2号址を切断して

第8図 第2地区縄文式住居址実測図



構築している。

本址は、隅丸方形的な直線部分の多い隔壁をもち、推定規模は4.5m。壁高は20~30cmとやや浅い。周溝は西~北西~北東部に市15~20cm、深さ10~15cmで認められる。壁外施設は見当らないが、北部は第2号址床面を切断して構築したため極めて堅密であり、P2壁外から北東部にかけて約1mにわたって赤色焼土が検出された。

床面上の施設としては、柱穴、竪穴炉、連続した三個の掘り込みがある。床面は、竪穴炉より西部は堅密で平らである。主柱穴P1(32×38, -48), P2(55×70, -61)は明確であるが、他のP3, P7などの小ピットは、5~10cmの深さで補助柱穴なのかは不明である。P4(-39), P5(-43), P6(-40)は連続した掘り込みで不整形を呈し、本址に伴う貯蔵穴のものか、本址廻縁後に何らかの目的をもって掘られた穴かは確認できなかった。P5の東から第4号址間に黄色土が径1.3mにわたって50cmに盛り土されており、この穴を掘り上げた土であろう。

竪穴炉は中央やや北寄りで、南北1.5m、東西1.15m、深さ50cmを計測する。炉礫石は5個原位置に存するが他は炉址内に崩れ落ちている。その崩れ方から故意になされたものらしい。炉址内には、焼土、炭が多量にあり、これに混じて骨片が検出された。また、土偶足部片、加曾利E式土器片、凹石の出土があった。

本址からの出土遺物としては、打石斧、凹石、加曾利E式土器片があり、土器片は、炉址周辺及び炉址内に集中して出土をみた。

出土土器片からして本址の時期を繩文中期加曾利E式期におきたい。

(2) 第2号住居址(第8図版11)

本址は第1号址と第5号址に切断され、プランは不明である。第1号址P2北よりに見られる赤色焼土は本址のものである。北西部分に本址の側壁と周溝が一部検出され、壁高は16cm、周溝15~20cmで深さ10~15cmを有する。床面は、焼土を中心とした西と東は、極めて堅密である。P8(径30, -24), P9(径30-31)は本址のものであり、P10, P11, P13も本址のものと考えられる。

本址に関係すると思われる遺物は、P8周辺から出土したが加曾利E式土器片と凹石でも少なく時期決定は困難である。

(3) 第3号住居址(第8図版2の下、6の下、12の上)

本址は、C~Eの15~17グリットに確認されたもので、今次調査で完掘できた完形の住居地である。径5.2mの円形プランで側壁は北半分に存し、周溝(7~20cm深さ10~20cm

）が囲繞している。壁外施設は見当らないが、北隣り20cmに第6号址が、南には第4号址が本址に切断されて存する。

床面は平らで堅緻である。床面上の施設としては、柱穴、堅穴炉、埋甕、周溝がある。主柱穴は、東西南北に位置するP 16 (45×40, -47), P 17 (40×25, -45), P 18 (40×30, -42), P 19 (45×30, -48) の4穴で、いずれも半円形を呈する。浅い小ピットがP 16とP 19間に2個、P 16とP 17間に3個、P 17とP 18間に5個存する。

堅穴炉は円形 (105×100, -50) を呈し、中央やや南東寄りに位置している。北東部のみ炉縁石が原位置にあるが他はない。もともとなかったか取り去られたかは不明。炉址内には、30cmの厚さで焼土が充満し、その上から灰及び骨片の混在が認められた。

埋甕（第14図の62）は北西部の周溝内20cmの床面下に、底部を欠いたものが底部を上にした逆位で埋められている。口径36cm、高さ37cmの加曾利E II式土器である。内部は黒色土が充満していたが、他の遺物の検出はみられなかった。

本址出土遺物は、打石斧、凹石、加曾利E式土器片であり、土器片は炉址周辺より多量に出土をみた。本址所属時期は、埋甕等出土土器からして绳文中期加曾利E II式期におけるよう。

(4) 第4号住居址（第8図、図版12の上7の上）

本址はB・Cの15~17グリットに確認されたもので、北半分は第3号址に切断されている。円形ないし梢円形プランで北東~南西への径は5mを数える。西部から北東部は側壁で、南から東は周溝で囲まれている。

本址は発掘途上から注目されたもので、廃屋後、いわゆる「吹上パターン」と言うべき土器捨て場となった住居址である。地表下60cmから30cm間の厚さに、特にBの16, 17グリットに堆积し、10~15cmの黒褐色の間層をおいて床面となっている。わけてもP 20の西30cmからP 22にかけてがその中心であることが住居址露呈後判明した。堆积された土器は、大破片から小破片まで、更に時期的には、勝坂式、加曾利E式と混在している。

床面は16個の大小ピットがあって、どこかこしているが概して堅い。床面上の施設としては、多くのピットと埋甕がある。主柱穴としてP 21 (60×30, -55), P 22 (35×30-36), P 23 (75×60, -60), P 24 (30×20, -44), P 20 (35×35, -78) が考えられるが、P 23はやや大きすぎ、P 20は穴の傾きから想像すると上屋中央辺に行きそうで、5穴を主柱穴とすれば上屋構造は特殊なものであったと推定される。またP 22から続く掘り込み内には2個の自然石があり、うち1個は丸石で、信仰につながるものかも知れない。

埋甕は特殊な器形で、埋甕というより床面下へ壺の底部に穿孔したものを作成して埋めた「伏せ壺」といった方が適切な表現である。（第9図3図版15）この伏せ壺内は黒色

土が充満し、それに混って微量の炭、ドングリらしい皮の炭化物1個、トクサないしスギナのような植物の炭化物3個と小骨粉の検出があった。また、伏せ壺を取りまくかの如くに存する小ピットも、この伏せ壺に關係があるもののように思える。先記した、廻屋後の土器捨場、柱穴の位置、丸石の存在、伏せ壺等から勘案すれば、本址は、特殊な信仰的性格を有する家屋と考えられよう。従ってプランも円形ないし梢円形としたが、梢円形を呈し、特別な上屋構造をもっていたのではないだろうか。本址は伏せ壺からして攔文中期勝坂間に所属させたい。

(5) 第5号住居址 (第8図、図版7の下、11の上、12の下)

本址はD、Eの13、14グリットに確認されたもので、北半分は日程上から露呈でき得なかつたが径約5mの円形プランを呈するものであろう。西壁と東壁が認められ、南側はピットが連続して本址を区画している。壁高は20~25cmで東壁は垂直に近い傾斜をもつ。南側に沿ってあるP 10、P 11、P 13は第2号址に關係するものであろう。

床面は平滑で堅緻であり、柱穴、自然石、埋甕、竪穴炉、周溝が存在する。主柱穴は、P 14 (55×40, -45), P 15 (40×30, -45)で半円形を呈し、第3号址の形状に類似する。竪穴炉は完掘できなかったがほぼ中央に位置するらしい。東西の短径1.10mの梢円形を呈し深さは60cmで底部は焼けている。炉址内から炭、小骨片の検出と加曾利E式土器片の出土があった。

埋甕は西壁内65cmに加曾利E II式土器を口縁部を上にして床面下に埋められていた。(第13図の45図版7の下) 内部は黒色土が充満していたが他の遺物の検出はなかった。

本址からの出土遺物は、打石斧、凹石、土器片で、土器片は炉址東側に多く出土をみた出土土器及び埋甕からして本址は第3号址と同時期に考えたい。

(6) 第6号住居址 (第8図)

本址はEの15、16グリットにその南部輪郭を認めたが日程の關係で全く発掘されず、位置の確認だけに終わったものである。南には20mにおいて第3号址があり、西の第5号址との関連は不明である。

(山田瑞穂)

第3章 遺物

第1節 繩文式遺物

1. 土器

今回の発掘調査によって出土した土器総量は整理箱50箱あまりにもおよぶ。このうち、完形および復元可能で器形の完全に判るものは11例ある。時期的には縄文前期より弥生時代前半に至るものであるが、その主体は圧倒的に縄文中期であり、特にB16を中心とした第4号住居址上層では、第1次発掘の際と同様に同一レベルに土器片が墜集していた。全体的にみると、第2地点の出土量に対して第3地点では僅少。第2、第3地点の中間地点では10%弱である。

これらの出土土器を器形、文様などを中心として分類すると11類に分けられる。

第1類土器（図版13、第10図9～12）

縄文前期に比定される土器であるが、小破片が僅か4片しかない。いずれも半截竹管による結節浮状文で、前期終末の下島式直後か、晴ヶ峰式に類似するものである。9は口縁部であるが、縄文と平行沈線の地文に口縁にそって2条と、縁に2条の結節浮隆線文を施してある。口縁は一部欠損していてはっきりしないが、波状口縁となるのではないか。10は縄文と結節浮隆線文、11は無文、12は条痕文を地文とし、結節文を施している。これらはいずれも胎土焼成ともよく、2がやや黒色のほかは、明かるい褐色を呈している。第1次調査の際にも本類は数片の出土をみているほか、唐沢遺跡でも同様の出土をみている

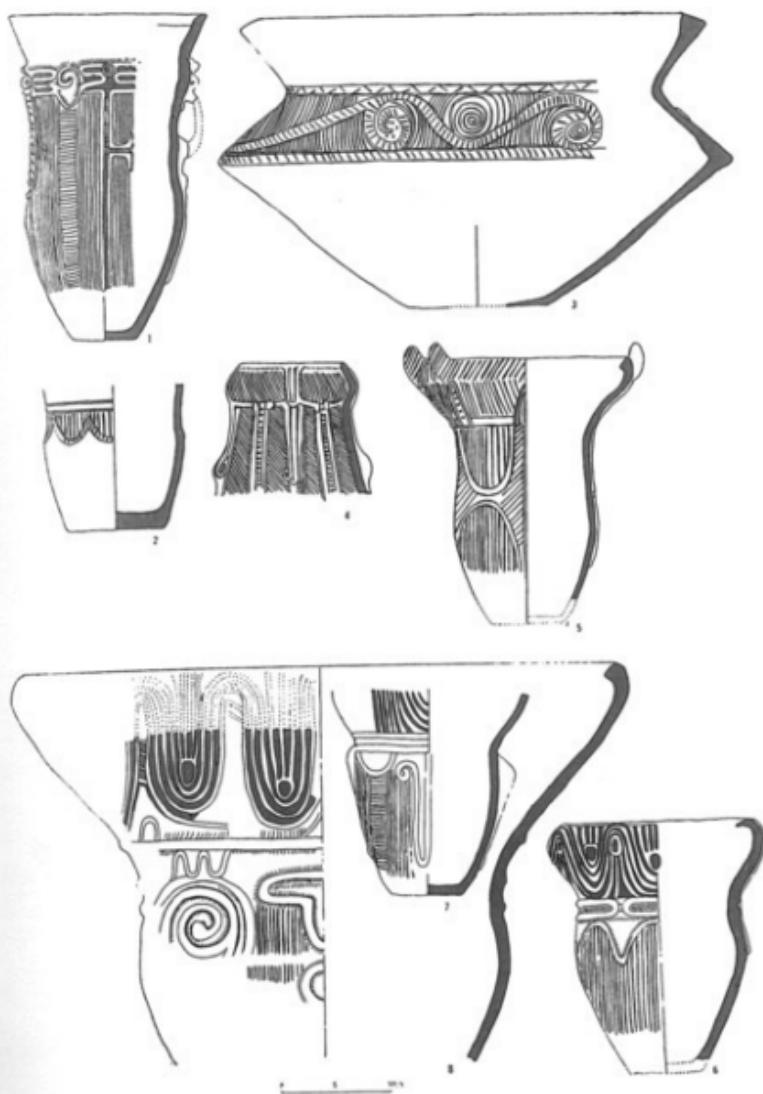
第2類土器（図版13、第10図13、14）

縄文中期前半に比定されるものを選んだがこれも僅か2片にすぎない。13は平縁で円筒形の深鉢と推定されるが、肥厚した口縁から半截竹管による半笠起線を下し、仙は無面の縄文を施してある。梨久保式に類似している。焼成胎土とも良く、堅硬で茶褐色を呈し、外面一部は黒変している。14は小破片で器形は深鉢であろう。口縁をめぐる縁帶に指頭で圧し、その下を半截竹管による沈線と細い条痕文を地文としている。茶褐色の焼成のよい土器である。

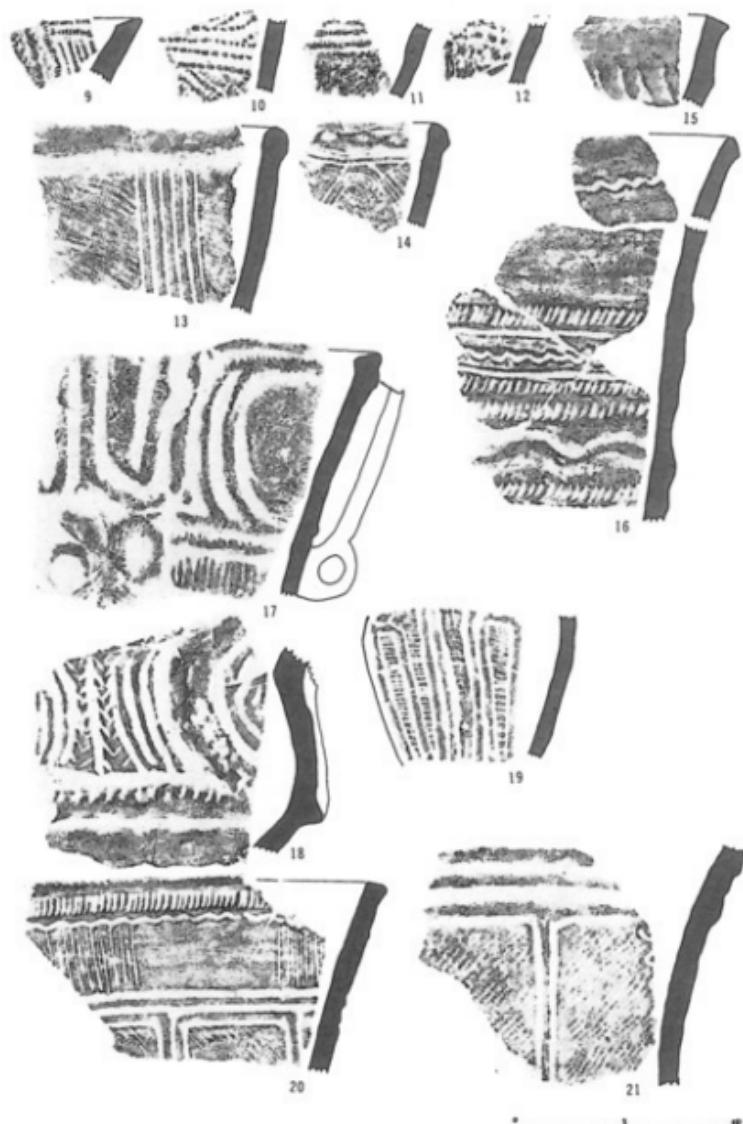
第3類土器（図版13～15、第9図1～8、第10図15～21、第11図22～28）

本類は阿玉台式、勝坂式土器に比定されるものであるが、B、Cの16を中心とした墜集した土器については、やや時期的に下ると思われるものも含めてある。特に勝坂期より加曾利

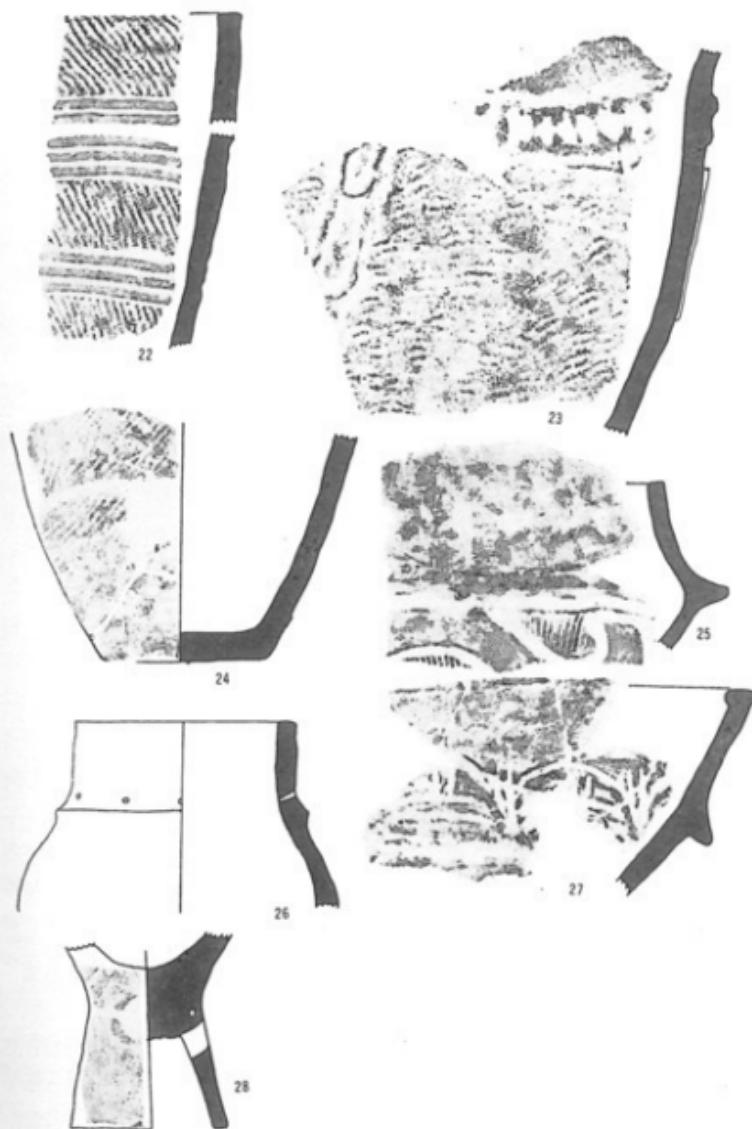
第9図 跡文式土器実測図



第10圖 圖文式土器拓影



第11圖 條文式土器拓影



E期に移行する時期と思われるものは、一部第4類土器と重なるものもある。本類は第4類に次いで出土量が多く器形の判明するものも多いので、次のように細分することができる。

a種、15は阿玉台式に比定されるもので、一片しかない。ほぼ直立する口縁の下部に器面調整の指紋が残っている。胎土には石英の繊維が含まれている。

b種、勝坂式に比定されるもので、器形により更に細分することができるが、文様は複雑多種で一概には言えない。縄文を用いているものは少なく、爪形文・区割文・隆帯を用いているものが主である。また総体的にみても大把手、あるいは重厚な隆帯などで飾るといったこの時期の最盛期の特徴のものは極少で、例示するように、あっさりとしたものになっている。胎土焼成はいずれもよく、堅硬なものが多い。

深鉢形土器 大別して爪形文・隆線文などによるものと、縄文を用いているものの2種に分けられる。16~20は前者に、21~24は後者に属す。16は連續爪形文と波状沈線、波状隆帯の組合せによって、文様を構成するもの、17は隆帯と爪形文によるもので、太い粘土紐を折りまげて把手をつくりあげている。18は内縫する口縁で、キャリバー状になるものではないか。19は小型の鉢の腹部で、隆帯および区割された部分いっぱいに爪形文を施している。20は頸部以下縄文を用い、その手法が21と全く同一の点、後者の方に入れた方がよかったかも知れないが、ととのった爪形文、波状、平行沈線の組合せをとって前者に加えた。これらの色調は16が拗黒色、19が赤褐色の他は茶褐色である。特に20はていねいにつくられていて端精らしい。1は頸部に折りたたんだ隆帯と爪形文を変化させ、腹部には隆帯とともに、半截竹管による平行沈線を縱横に胴下部まで下している。口縁は無文で口径約18cm、高さ29.5cmである。2は胴下部のみであるが、二本の隆帯の下に半円形の隆帯をつらね、その内部に平行沈線を下している。これらはいずれも周辺遺跡より類似したものが出土している。21は20とは異体ではあるが同一文様をとるもの。22はよくととのった横帶文と、縄文の美しい土器で、平底の円筒形をした推定口径12mmあまりのもの。23はあるいは雲母の入った胎土に縄文を施し、それに頸部に当るとと思われるところに梯子状の隆帯を、更には一部に細い梯子状の隆帯を垂下させている。器厚1cm、口径約40cmの大形土器である。24は胴下半部であるが、縄文地に細い沈線をうねらせて垂下させている。質はやや柔らかく縄文も浅い。中期中半より後半に近い土器であろう。

樽型土器 25は内縫する無文の口縁より鋤がはり出し、その下部に区割の中に沈線を施している。赤褐色の堅硬な土器である。26は有孔鋤付土器で頸部にわずかに隆起する鋤がめぐり、その上部に3mmあまりの小孔がうがたれている。推定口径10cm、小孔は16ヶあまりあったのではないか。これも前者同様赤褐色の堅硬なよく磨かれた土器である。

浅鉢型土器 27は口縁下部に前述の鉢とも思われる縫帶があり、そのそりあかりの面を利用して、半円形に縦に2本の沈線を施している。底部がどの程度の深さか不明なので図示しなかったが、角度の大きい底部があり浅鉢といえる。胎土はやや悪くざらついている。3は第4号住居址の伏鉢（図版7）で口径38cm、胴部は46cmで底には不整形の穴があいている。文様は頭部から胴上部のはり出したところに割目のある溝文の縫帶と渦文の沈線、それに同心円の沈線を施し、上部くびれ部分にはハの字の沈線、下部はり出し部分には割目を施している。口径は厚いが器壁は平均9mmで大型土器としては薄い。胎土焼成とともにすぐれ、磨かれて赤褐色を呈している。周辺遺跡においては類例のないものである。

台付土器 28は台付土器の下半部分である。窓はイケ所あり、台の下部近くまで縛文が施されている。胎土焼成は16に似て柔らかい感じである。

c類、勝坂期より加曾利E期に移行する頃のもので、あるいは加曾利Eの古式にあたるとも言えよう。4はやや口のつばまる壺型にも似た形状をなすものであろうか。縫い平行沈線と爪形文に退化した把手をつけている。焼成胎土ともによく、黒褐色を呈している。5～8はいずれもキャリバー状をなすものであるが、5は角状把手をもち口唇部の内屈したもので、口唇部では斜行する深い平行沈線と三叉状の縫線、胴部では曲線の縫線で区劃された内部に縦に平行沈線を、他は斜行する平行沈線を施している。口径19cm、現高22cmで3と質が似ている。6～8はいずれも口縁部では流水にも似た大きくなれる粘土紐を貼りつけ、支点となるところに小さな円を引き、頭部以下は、6は爪形文をめぐらせ、以下半円をつなぐように縫線を描き、深い平行沈線を施している。7は小さな平たい把手をそのままワラビ状の縫線につなげ、他は上向きの半円をつらね、以下縫横の深い平行沈線を施している。8は大型土器で口径51cmをかぞえ、頭部以下が更に変化をきわめTの字を回むような縫帶と渦巻状の縫帶、それに爪形文と深い平行沈線が続いている。このうち特に5は内面に厚く炭化物の付着がみられる。これらの類品は平出、頬久保、今井上新田など近在の遺跡より出土している。

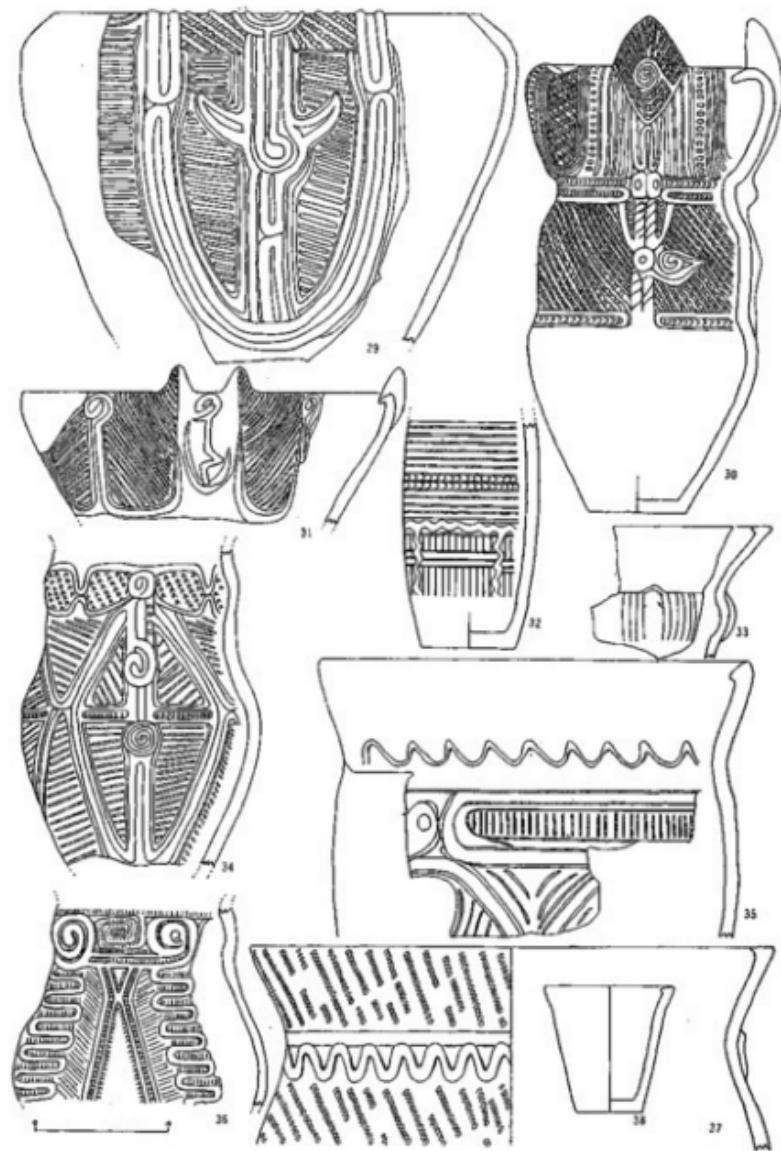
第9図で示したもののうち、いわゆる土器だまりともいわれる縛集していたものは、1および4～8である。

（神沢昌二郎）

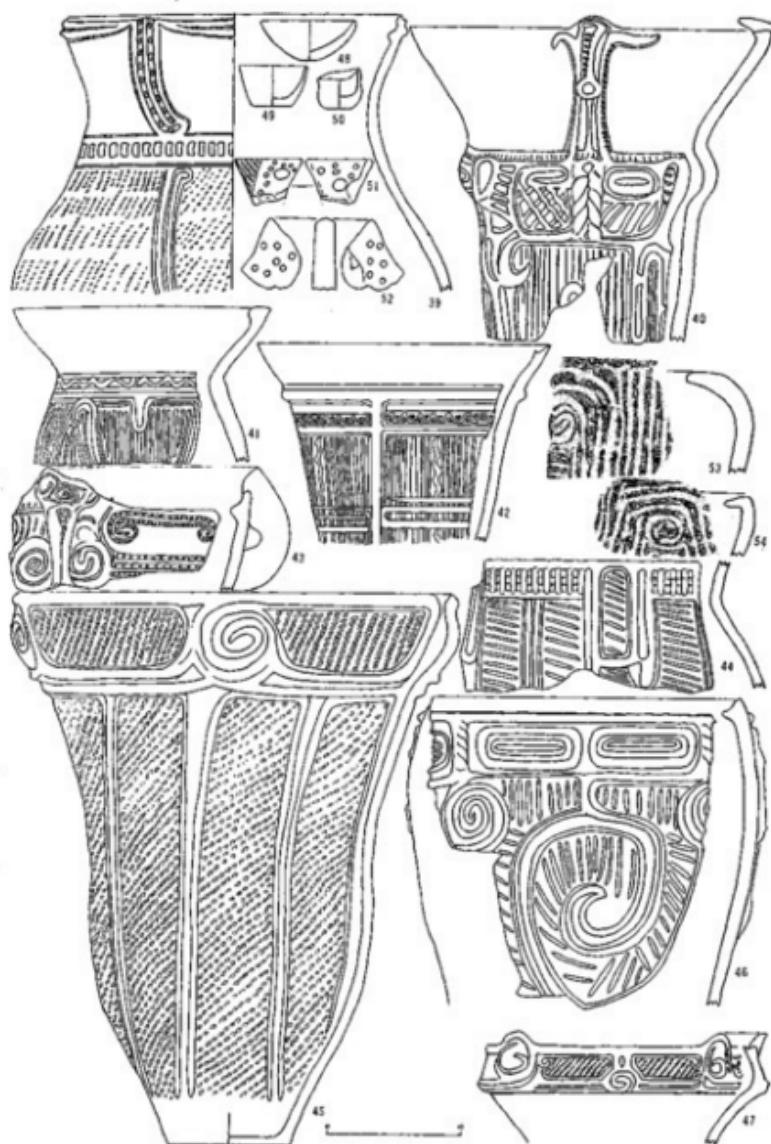
第4類土器（図版16・17、第12図29～37、第13図39・41・44）

本類はB・C16の、-60cm前後に中心をおく、第4号住居址の覆土中より一括検出されたものが多い。従ってその所在が「縛集」、「土器だまり」的な特殊な状態を示して複雑であるが、土器そのものは器形あるいは縛文面に、先行土器の特徴を強く残しており、図上復元されたものも比較的多かった。縛じて焼成よく茶褐色又は黒褐色を呈し、器厚は7～10mmを示す中厚手で、胎土中に約半数のものは輝雲母の含有がみられる。29は口縁が内

第12圖 繩文式土器實測圖



第13圖 挪文式土器実測図



第14図 繩文式土器実測図



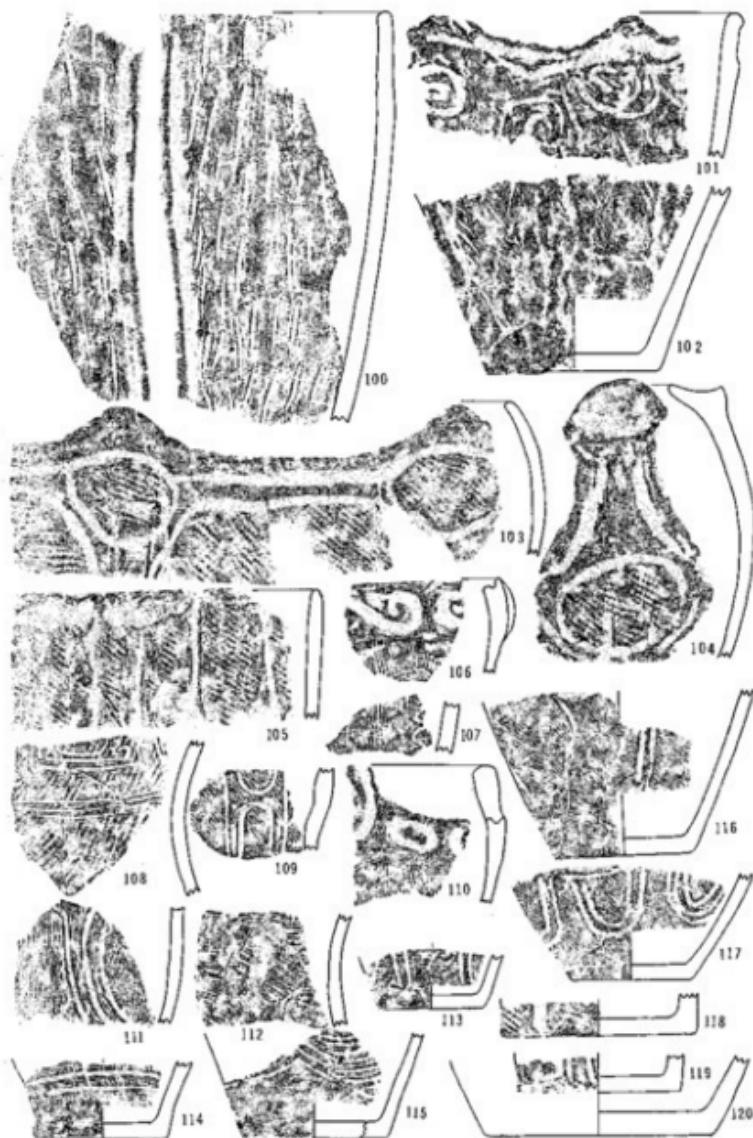
第15圖 鎏文式土器実測図と拓影



第16圖 槅文式土器拓影



第17图 瓢文式土器拓影



現する大形の平縁深鉢形土器で、口縁部に粘土紐を斜めに交叉させ、胴部にかけて力強い隆起線を配し、空間を単方向の沈線で埋めている。30は口経12.7cm、高さ33.5cm、底部径7.2cmの中形を示し、口縁部や胴部に粘土紐を斜格子状に貼布し、平縁上に三角状の突起物を四個配した、立体装飾を具現する優美な土器で、内外の壁面調整をよくしている。中南信地方に散見されるが、類例は少くない。31も平縁上に突起物をもち、隆起線区画内を整った沈線で埋めており、口径はやや広く25.6cmとなる。34・36は共に口縁部と底部を欠き、34は頸部に粘土紐で眼鏡状に連続区画をとり、内を刺突列点文でみたし、胴部は平行する隆起線を、縱横斜めに走らせて各々交叉個所で集約させる特徴をもつ。区画内は整った沈線を施している。36は頸部に隆帶圓巻文を、胴部は蛇行する隆帶を重ね、一方平行する隆起線を×状に貼りながら、連續刺突を施し、他は沈線や空間をそのまま残している。32は内外壁面調整のよい円筒形土器で口縁部を欠く。C17出土で、調上部にやや深い半載竹管文によってできる浮隆線が10数段重なり、一部の上面に押引文を施して文様効果をあげ、下半部は粘土紐による蛇行文を縱横に施し、整った沈線を併用している。35は調下部を欠く口経32cmの土器で、口縁部は広く無文となり、頸部に隆起線による大形波状文を1条横走させ、胴部にかけて勝坂期の色彩を強く残す施文をとっている。37は口経39cmの大形土器を示し、頸部に横走する太い隆帶と粘土紐による蛇行文が貼布され、器全面に節の大きな施文がまばらに施される。120は本土型の底部とみられるものである。33はB5出土で、前記、「岬集」・「土器だまり」の土器類とはその出土地点を異にしている。やはり口縁部は広く無文帯となり、頸部に縱方向の粘土紐を密に並べて、僅かながらの装飾を施す。41は頸部のくびれに粘土紐蛇行文を配し、胴部にかけては半載竹管による、整った深い沈線を垂下させ、浮隆線を残して陰陽の表出をよくしている。口経は16.5cmで内外の壁面調整は、33・39と共によい。39は口経25.2cm、40は27cmで共に口縁部に巾広い無文帯をもつが、その空間に隆帶と刺突併用による装飾を1本施している。頸部には粘土紐駆使による横帶区画文をとり、胴部にかけて39は施文を、40は整った沈線と浮隆線を残す。44は頸部に粘土紐装飾をもち、胴部の隆帶区画に単方向の沈線を施す。口縁部を欠くが蹲母を含み調整はよい。

第5類土器（図版17～21・第13図42・43・45～47・53・54、第14図55～58・60～71、第15図72・73・75・76・78～81、第16図82～96、第17図115）

第5類土器に入ると、その様相は口唇部周辺の変化、施文面等で多様化し、その前後關係やいくつもの系統を異にする流れがみられて複雑を極める。従って本類土器は更に細分を試み、a～g類に整理して叙述したい。又限られた掲図に数多くの資料を包含したため、

一部見苦しい点があることを了とせられたい。

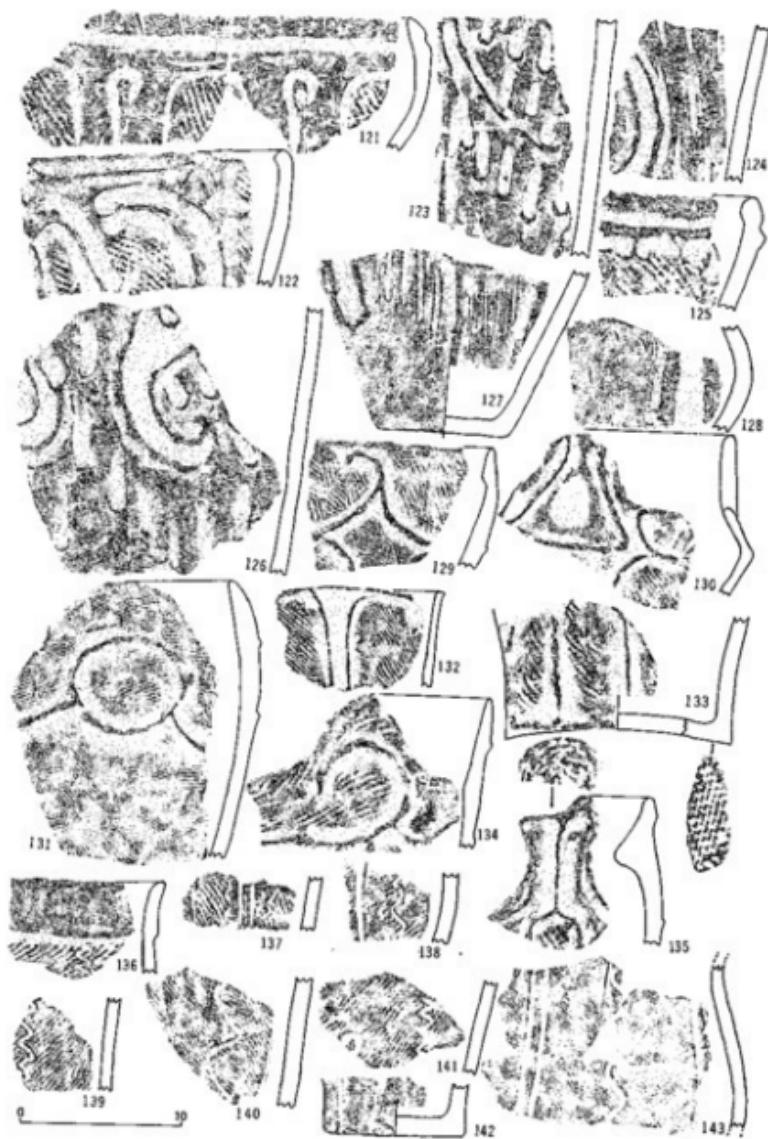
a 42が唯一の資料で、口径22cmの鉢形土器である。口縁部に無文帯を残し、墻帯を横走、垂下させることにより腹部に区画をとり、上部に刺突によって表出される蛇行文を、下部に縱方向の平行沈線や、沈線による蛇行文を1条配しながら全面施文する。内壁にヘラによる調整痕が残るが、全体にすっきりしており、時期的には第5類土器の中でも先行するものであろう。

b 53・54・56・57が含まれる。この中53・54は口縁部が内側に強く弯曲する。この器形のあり方は第9図6～8や29・30等に描いて類似し、粘土紐にかかる条線が渦文を残したり、横方向に引かれている。56・57は口縁部の弯曲が殆どなくなり、斜行する沈線が密となって、57には突起状の渦巻加飾が付加される。

c 45・47・55・58・63・71が本項で、いずれも縄文の併用された土器を括した。然し他の埴文の在り方、口唇部特にその内側周辺の作りに特徴を示すもの等変化に富み一様ではない。63～65は共にB13・14の-80～-100cm出土土器である。あるいは同一個体かと考えられるが、波状口縁部破片で、平行する隆起線が口唇近くをめぐり、渦巻を形成したり垂下したりして区画をとららしく、その内部を羽状あるいは單方向の斜縄文で充たしている。器の内側口唇直下を、1本の隆起線がめぐる特徴があり、これらの点や平行隆起線のあり方は93等に類似する。又63の波頂部の内側には、図示しないが隆起線周囲の加飾がある。口唇直下の内側に隆起線が横走する例としては、第5類土器に多く前記の他、39・43・89・91～95・99等をあげることができる。45・47・55・58・66～71は口縁部に渦巻文と隆起線又は墻帶によって区画された横文帯をもち、縄文を施す類である。口唇内側直下の隆起線は全くみられない。66～69はB13に中心をおく-65cm前後の出土で、器厚は5mm。焼成のよい平縁口縁部破片である。55は第1号住居址床面出土の図上復元土器である。47と共に胎土に輝雲母を含有しており、口径25cm、底部径7cm、高さ40cmを示して口縁は波状となる。沈線と浮線による渦巻文つなぎの懸垂文が底部近くまでせまり、他の器面に縄文を施す。45は第5号住居址の埋蔵で、口径33.2cm、底部径9cm、高さ42cm。58は板状の頂部を4個形成する口径22cmの土器であるが、渦巻文、懸垂文のあり方で55よりやや時間をおくものであろう。47は口縁部が「く」字状を呈する浅鉢形土器で、胴部は無文となる。又採用しなかったけれど、同形で施文をほぼ同じくする別個体の土器には、腹部に細かい痕跡的な縄文の施されたものもあった。70・71は横文帯が崩れた感じである。

d 79・84～96が含まれ、刺突によって描出される浮縫線蛇行文を、意識的に残す類79・84～89・91・95・96と、これを伴わない類90・92～94との2種がある。前者は器厚8mm

第18图 龙文式土器拓影



前後、胎土に殆んど輝製母を含み、焼成よく黒褐色系をとる。この中86は第5号、87は第3号各住居址床面出土である。口縁部が波状となるもの5例、平縁となるもの3例あり、施文面では前記厚隆線蛇行文を特徴とする他、渦巻文の併用もなされる。又口縁部に無文帯を残す類や、口唇内側直下に隆起線をめぐらす89・91~95なども特徴とされる。後者は前者の特徴文を除く他は、施文面で共通する点が多く、平行隆起線による渦巻文や、縱横走させることによって角状の区画帯をつくり、内部に沈線文がみたされる。主として平行する隆起線は渦巻文に集約される傾向をもち、第4類土器34の流れを感じしめる。94は第1号住居址床面出土で、陰陽の渦巻文が多見され、93の隆起線の1部は、その上面に刺突が加えられる。後者でも平縁1例、波状となるもの3例で、全体的に波状口縁を形成する傾向が強い。尚84~87等にみられる口唇内側直下の隆起線はより口唇近くに施されており前述の91~95等とはやや趣を異にしている。更に口唇のつくりについて云先は、46・55・57・61・82・90等は、口唇端に隆起線を付加して複合口唇を形成させるものであり、66~70の様にその傾向の全くみられないもの等、大別4種類の相がうかがえる。

e 43・46・60~62・75・76・78・80~83・115が挙げられる。これらは施文面等で1括できないものを感ずるので、その個々について述べたい。75は第3号住居址床上、43は第5号住居址床上出土で、共に口縁部帯の装飾や施文に類似点のうかがえるものである。黄褐色を呈し、波状口縁に渦巻の組合せによる立体把手をもち、隆帶と沈線と刺突による横筋区画文をとり、腹部にかけて、複雑な変化をもたらす懸垂文をめぐらせて膝衫文を施す。46・60は口縁部に隆帶と沈線、渦巻文等により横筋区画文をとり、61・62は無文部と渦巻つなぎの追いまわしがめぐる。腹部にかけては、直行あるいは蛇行する隆帶懸垂文が走り、区画内に戴或いは横方向、綾衫状等の沈線が施される。46は第3号住居址床面上出土で、口径23cmの平縁厚手土器であり、中信地方で類例が散見されるが、文様面をよくみると、全体の構図として耳飾りをつけた人面を模している様に思われる。第4類土器にあげた40なども、全体の感じとして冠をつけた人面に思われるが、人面を意図的に推出したとみられるものがある点注意したい。62は第3号住居址の埋甕で、平縁口径は36.6cmを示す大形であり底部を欠く。60・61は波状口縁を形成し、共に波頭部の内側にも渦巻文を施し、口唇内側直下に平行して、断面三角状の隆起帯が1本はしる。80は第3号住居址周壁面出土で、34と同様の施文を示しており、115はD12の-55cm前後出土で、61に類似するものの土器底部であろう。80・81~83は、共に平縁口縁部に無文帯を残し、渦巻つなぎの追いまわしをめぐらした後、腹部にかけて複雑多岐な懸垂渦巻文を、隆帶あるいは巾広の沈線で引き、他を沈線で埋めつくす類である。いずれも大形の深鉢で、前述の43・75とは後出する一群とみられる。78は第1号住居址の炉内出土で、口縁部に刺突文と刺突によって

生する蛇行文が横走し、胴部沈線文の地文として、縱方向の櫛目状櫛沈線文が密に施されている。81は縱方向の數条が1単位を示す、櫛目波状沈線文が密となり、胎土に輝雲母を含んで、内壁が研磨されている。刺突によって生ずる浮雕蛇行文は、前述の第5類土器dとの関係に於いて、又櫛目状沈線文は、後述の第6類土器bとの関係に於いて、深い結びつきを感じしめるものである。83は第3号住居址床上出土。76は小形土器の胴部破片で、渦巻隆帯つなぎの懸垂文と波紋状沈線文が施されている。

f 72・73の2例のみで72は第1号住居址P7内出土。73は第5号住居址床面出土である。共に器厚7mm、焼成よく赤褐色、黒褐色となる。いずれも平縁口縁部に突出加飾をもち、退化した橋状把手をもつらしい。口径は72が20cm、73が17cmと中形の鉢形土器を示し施文は口縁部に細い隆起線によって区画された横文帯をつくり、内部を刺突によって描出する蛇行状文や沈線でみたし、胴部にかけては、小形化した渦巻文や細い懸垂文をはり、方向のやや乱れた沈線文を施す特徴がある。施文面から受ける感じでは、第5類土器の中でも全体に退化現象がうかがえるもので、後出するものであろう。

第6類土器（図版19～22、第15図77、第16図97～99、第17図100・106・107・110・114、第18図123・124・126～128）

第6類土器は施文面の特徴により、更にa～cの3種に細分する。

a 77の1例のみで他に同類を認めなかった。C15の-65cmより出土し、器厚は1cm前後の厚手を示す、平縁口径19.7cmの変形土器である。口縁に平行して1条の隆帯が横走し退化した渦文から懸垂文がくだり、器面に粗雑な縞文が方向を一定せず施される。

b 97～99・106・107・110・114が含まれる。これらはいずれも櫛目状沈線文が、縱方向に施されるのを特徴とするもので、97・99は平行する隆起線が口縁部に走って渦巻文を形成し、99・107は櫛目状沈線文を地文として、尚曲直沈線文、蛇行沈線文が加えられる。97は太巾の凹凸区画があり、106・110は口唇に突起の加飾をもつが、退化した渦巻文が、口縁部へ凹凸によって描かれており、前述のものより後出するものであろう。内壁の調整は良好である。98は腹部破片、114は第3号住居址周溝内より出土した網代底の破片で、底部径は8cm、櫛目状沈線がやや粗で縫を異にし、横走する太目の沈線がみられる。この中99の口唇内側底下には、横走する隆起線がめぐっており、又施文面から受ける感じでは第5類土器Cと同時期に併存するものかも知れない。

c 100・123・124・126～128が該当し、共に器厚1cmの大形深鉢土器の破片とみられるもの（128を除く）、焼成比較的よく茶褐色及至る黒褐色となる。平行する曲、底の隆起線帶が胴部をめぐり、128を除き鏝状工具によると想はれる、縱方向の断続する条縞文が施されるが、123・126は太巾の長縫円状となって、上より下へ押引され、96は中位の

100・127は細長い沈線状となるものを残している。127の底部経8cm、100の口縁部をもつ大形破片の他は調査破片である。128は綾杉文の退化したハの字状短沈線を、縱方向に連続させている。これらの土器は、本遺跡にあっても以上挙げたにとどまり、總じて出土量の少くない遺物と云える。

7 繩土器（図版18・21・22・第14図59・第17図103～105・108・109・111～113・116～119・第18図121・122・125・136～141・143）

本類はいずれも縄文の施されたものを取り扱ったが、他の併用される施文の相違により、これをa・bの2種に分ける。

a 59・105・108・109・111～113・116・117～119・136～141・143を1括した。縄文に記す直行沈線文或いは蛇行沈線文が併用されており、器厚は8mm前後、焼成はよく茶褐色系で、胎土に約半数のものは輝雲母を含む。C16を中心とする、-60cm前後の出土が多數をしめる。59は底部経7cmの脇部からの欠損品で、鉢形を示すものと思はれ、113・117～119は底端破片で、その底部経は6.5～11cmの巾を示しており、1113・118・119は網代底となる。116・136～141・143は共に地文としての麗文と、蛇行沈線文が併用される1群であり、蛇行の細かなもの136～138と、大まかなもの140・143との2種がある。尚116・137・138・140・143には直線状に垂下する沈線文が加えられる。136は第3号住居址周辺内出土で平素口縁の上部に無文帶を残し、116は底部経8.5cmを示す内面研磨土器である。137の蛇行を示す沈線は、結束された麗文の末端部によって、表出されるもの様である。105は平底ノ口縁が10.5cmを示す。以上の資料に施された縄文は、右傾するもの11例、左傾するもの7例であり、111が横位、112は断続する縄文となっている。

b 103・104・121・122・125を取扱った。太巾沈線区間に麗文が施される類で、103は口縁27.4cmを示す波状口縁部、104は同一個体とみられる退化した把手で、共にC16の-40cm出土であり、器厚7mmを記す。121は平縁の口縁が27.5cmで、施文面で縦を異にし麗文の変化し退化したことから生ずるものとみられる、蒙手状沈線文が併用される。122・125も平縁口縁部で、蒙手状沈線文が更に変化した姿をとどめるものであろう。いずれも大形の深鉢を形成するものと思はれる。この種土器は信濃各地に散見されるところであるが、出土量は少なく、本遺跡の周辺でも近くの波田村草原遺跡、東筑摩郡山形村洞庭跡、近尻市小丸山遺跡等々に類例を求めることができる。

8 繩土器（図版22・第18図129～135）

第18図129～135が本類で、特殊な隆起縁文と麗文とが組合せられた、一群の土器をまとめた。隆起縁は縦面に対して断面三角状を呈しており、それぞれの意図される構図によって、自在に駆使されている。縄文は全面に施されるものと、隆起縁によって区画された内

部又は外部をそのまま残し、他の面に施文を施して、一見磨消艶文風に仕上げたものの2種がある。これを換言すれば、器面に対し隆起線文の貼付が先行し、施文はその後に施文されることであり、施文の折に隆起線上にも施文の一部が転載されたものとして、129・131・133・134が挙げられる。器厚は6mm前後のものと、10mm前後のものとに大別でき、焼成はよく茶褐色、黒褐色系をとる。129・131・133・135は共にB6の一50cm～70cmに出土し、134は第5号住居址床上。130・132はE13の一50cmより出土している。130・131・134・135は波状口縁部で、隆起線文が精円状或は三角状にめぐり、131・134は施文が全面に施され、130・135は無施文部がみられる。135は第4類土器bの104に類似する小形化する把手で、上部面を内側に向けて、斜めに半月状に切り刺突文を充てんしている。29・132は平底口縁部で、129は隆起線が菱形区画をとり、132は平行して垂下する。133は底部径14cmで大形土器を想像させ、網代底が上げ底に形成されており、間隔をおいて平行垂下する隆起線が底部まで達している。総じて施文される器文は繊細であり、施文後期にみられる磨消艶文とはその趣を異にしている。

第9類土器(図版16・17・19・21・22・第12図38・第13図48～52・第15図74・第17図101・102・120・第18図142)

本類は土器底部・無文土器・釣手・把手等を括した。土器底部の中102は仕上げ焼成共粗悪な厚手土器で、底部径は11cm。間隔をおいて垂下する隆起線が直線状に底部近くまではしり、その区画内に波状沈線文が密に施されている。近くの波田村草原遺跡出土土器に類似があり、大形の深鉢を示すものであろう。120はB16の一60cmより出土した、第4類土器37の底部破片とみられ、底部径14.2cmで網代底となっている。142は底部径8.4cmの網代底で、旋方向の沈線が外面にみられる。101は第3号住居址床面出土で、波状口縁部の口径が12cmの粗成土器、施文は沈線により、整然としない渦巻文のみが乱雜である。38は第5号住居址床上出土で、口径・高さ共9.7cm底部径5cmのコップ状無文土器。74は釣手土器の釣手部の破損品で、8.5cm巾をもちその体部は空洞となっている。下部より片面1面にかけて黒色となり、他の側面と上面にかけて茶褐色となる。施文は両側面に隆起渦巻文と刺突文が併用され、上部は左右側面を架構状に結び立体感をだし、その上面に第5類土器eの82・83等の口縁部にみられる、渦文つなぎに類似する深い沈線が施され、側面に中央部を丸く凹ませた、円状突出物が加飾されている。48はA6の一55cm出土、口径7.1cm高さ約3cmの小形丸底の無文土器。49はE13の一50cm～65cm出土の、口径5cm高さ3.1cm底部径3cmの平底無文土器。50は38と同じく第5号住居址床上の出土であり、粘土のかたまりの、中央部を凹ませた程度の粗成土器で、不規の口径が約3cm、高さ3.1cmの小形を示す。51はA5の一50cm出土、土器口唇上の崩りとみられるもので、施文と刺突

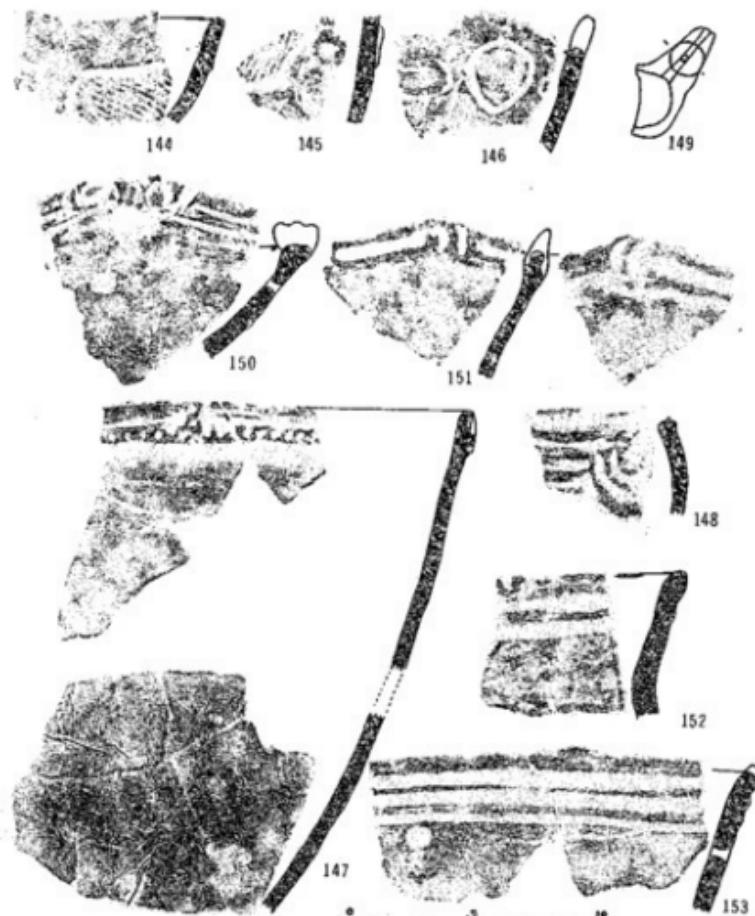
文の加飾あり、52はA 11の出土で、土器口唇の突起物か土製品の破損品とみられるもので
長妻に円形割突文が施されている。

(大久保知巳)

第10類土器（図版23、第19図144～151）

後期に比定される土器であるが、図示したものが出土したもの全てである。144はすり
削し縄文、145は壺の内式に特徴的な8字形の貼付文、146は無文に沈線で円を描いてい
る。いずれも本遺跡周辺では出土量が少なく、比較にならないが、146は縄文中期終末よ

第19図 縄文式土器拓影



りつながる時代になるのではないか。147は口縁部に凸帯をめぐらせその上に列点文を施していく更に一部には口唇まで縱に凸帯を施している。器面はへら磨きされ堅緻な土器で深鉢と思われる。下部に黒色にすゝけている他は黄茶色に近い色調を呈している。口径約30cmである。148は注口土器あるいは壺形土器ではないかと思われるが、太い沈線で平行線と半円を描いている。149は注口部分であるが、つくりはつたない。150・151は波状口縁をなし、150は口唇に2条の沈線と渦巻文、148は内外ともに太い一本の沈線で、波状口縁の頂部にのみ、縦に2条の沈線を短く刻んでいる。時代は147～149を後期前半の頃、150・151を後期中半の頃とみる。なお類例は雞山遺跡より出土をみている。

第11類土器（図版23、第19図9・10）

本類も僅か2片しかないので紹介するにとどめる。152は口縁にそって3本の太目の平行沈線と、口縁に小さな山形の隆起をもつ深鉢で水工式に比定できよう。153も同時期と思われるが、口唇に縦の沈線を付し、口縁が外反している。いずれも新断されている。類例は本遺跡周辺では女鳥羽川遺跡、雞山遺跡、石行遺跡などである。

（神沢昌二郎）

2. 石器

当遺跡出土の石器について、数量の上からいえる特徴は、多数の凹石及び打製石斧。反対にきわめて少數の石鏃及び石匙である。凹石は107箇を超えて、打製石斧は100箇にちかい。調査面積に比較して多數といってよいだろう。

また石鏃、石匙は紛失し易いものであるとは言え、それぞれ20箇、5箇というものは、いかにも少ない。

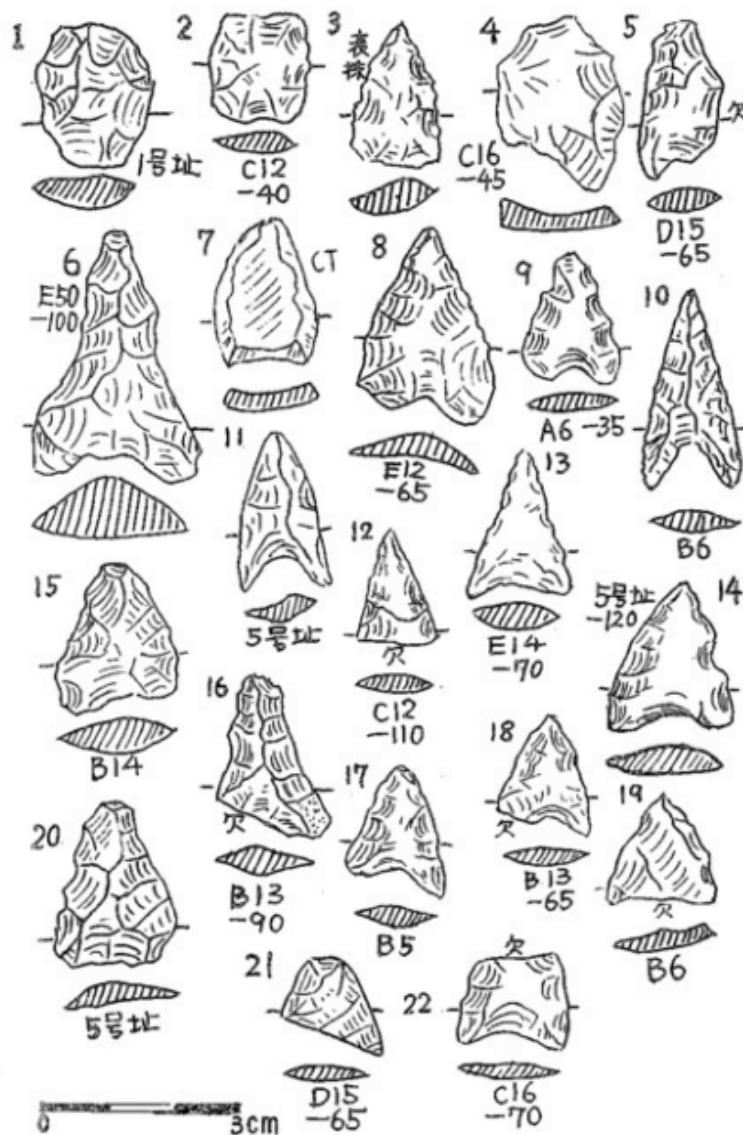
打製石斧が土掘り具であり、凹石がおそらくクルミ割りの道具であろうという考えに立ってみると、おのずからこの遺跡に住んだ人たちの姿が浮んでこよう。

つまり打製石斧を使用して植物の食用となる根茎を掘りとり、木の実を採集し、粉碎、混和して調理する。そのような食生活が主であり、時には狩猟にも出かけるということもあった。もちろん石器だけから、はっきりと断定はできないが、そのような可能性はあるのである。

（1）石鏃（図版24、第20図）

今回の調査において出土した石鏃は20点である。前回の5点に比べると多いが、調査面積のわりあいからすると、案外少ないという感じである。出土地点も特に集中しているわけではなく、AトレンチよりEトレンチまでバラつきを見せている。石材は3点の珪石の他は、すべて黒曜石製で、それも比較的透明なものが用いられている。

第20図 石器実測図



第20図、1, および2, はやはり黒曜石の拇指状のものであるが、単なる剥片ではなくあるいは石器製造の原形とも考えられる。

20点はすべて無柄であり、有柄は1点もない。形態によって分ければ次の二種とすることができます。

A、正三角形で大きさも一般的なもの（第20図9, 15, 17, 18など）

B、二等辺三角形を呈するもの（5, 10, 11, 13, 16など）この類は比較的大型で基底部の彎曲も大きく、先端も鋭利である。Aにくらべて一段と有効であったろう。図4, 7などは未完成品である。6は特に大型で3.7cmあるが調整は粗く不十分、先端も鈍い。16についても同じである。

（2）石匙（図版24、第21図）

今回の調査で出土した石匙は5点である。前回もそうであったが、やはり少いといえるだろう。このうち図10, 11は中期特有の粗大な安山岩製で、長方形にちかい横長の肩の張った形のものである。10はたいへん薄く両面から刃がつけられている。11は未完成品ともいえるような粗い調整痕を有し、背面は原石の面をそのまま残している。分厚く重い。12は欠損品であるがチャート製、中部山岳地方に多いなで肩のもので刃部には両面からの調整を加えてある。8は縦型でやはりチャート製、但し未完成品で片方に更に調整すべき余地を残す。刃部は両面調整によっている。この5点の出土地点も特に集中してはいない。7もチャート製であるが、未完成品で摘みの部分が完成していない。

刃部は両面調整である。

図の1, 2, 3, 4, 5, 6, 9は石匙に作るべく加工をはじめた工程のものといってよく、特に1はチャートをぐるぐるに巻きつけてあるにすぎないが、それでも横型の石匙になる要素は持っている。このうち5は縦型のものに作ろうとしたものであろうかこれだけが黒曜石である。9は硬砂岩、3と6が珪岩、2および4がチャートである。

その他13は拇指状石器とも、何かの未完成品ともいえる赤色チャートの製品、14, 15, 16はいずれも剥片であるが16のチャート製のものは摘みらしいものもつけられ、石匙としての機能もありそうなものである。14, 15は黒曜石である。

（3）石斧（図版24、第22, 23図）

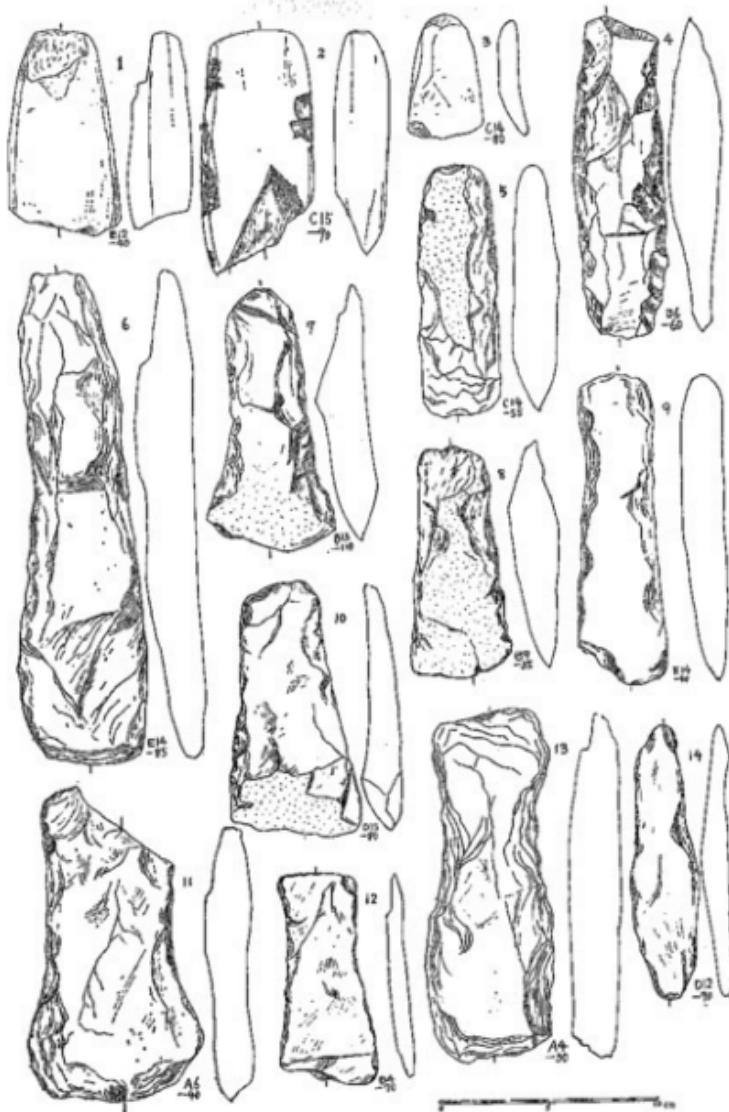
今回の当遺跡の発掘調査において出土した石斧の総数は95点で、うち磨製は4点にすぎない。表面採集および出土地点不明の5点を加えると100点になる。同時にこれだけのものが使用されたのでなくとも、相当な数量といってよいだろう。

出土地点をみて気づくことは、地点がおよそ偏在し、ある一定区域内に集中して出土を見ていることである。すなわち一つのグループはAの2より7グリットにかけてと、隣接

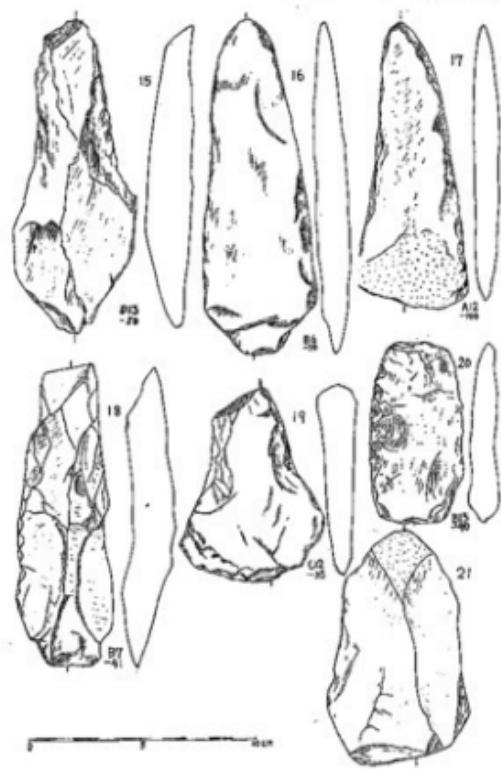
第21圖 石匙與石刀



第22図 石斧実測図（その1）



第23図 石斧実測図（その2）



するBの4から9グリットにかけての区域であって、ここからは磨製1を含めて39本が出土している。もう一つのグループは、Aの12Bの12から16、Cの12から15、Dの12から16、Eの12から16グリットにかけての区域で、ここからは磨製の3点を含め51点を出土している。この二つの区域を合計すると実に90本、90%が集中的に出土し、他のグリットは10本が散在してあつたにすぎない。この二つの区域は住居址のいくつかあったところで、やはり住居址の内外に出土が多いということになる。

昨年度の調査では、やはり今回とほぼ同数の石斧の出土を見たわけであるが、

そのうち特に粗製品（ただ原石を打ち欠いて出た剥片に僅に加工しただけのもの）が47%と多数を占めていたのに比べ、今回は15%にとどまる。この粗製品は完全に整形されるまでの未完成品と考えられる（図21）。なお大きさは15cm以内のものばかりであったが、1本だけ22cmに及ぶ大型のものがあった（図6）。

また分厚で頑丈なものに、ひどく薄手の扁平なものも數点見られたが、用途の上で異なるものがあったと考えられないこともない。

石質は硬砂岩製のものが多いが、他に若干の安山岩、片岩、チャート製が見られる。このうちチャート製のものは、他の石にくらべてはるかに鋭利であり、また美麗でもあるところから、同じ打製石斧といっても、他の石質のものと違った用途があったのかもしれない（図20）。

形状によって分類は、もともと規格があるての製作でないから、必ずしも厳密にはなし難いが、およそ次のように分けてみた。

その1は鷹頭といわゆる定角式とよばれているもので断片を入れて4本ある。（図1, 2, 3）

次はほぼ長方形を呈する短冊型で、6本ある。（図4, 5）

その3は頭部が幅狭く、刃部の縁の広い盤型のものであるが、数からいと60本、60%を占めている。この型式のものはさらに、柄を装着する部分にくびれをつけたもの、頭部が尖り、刃部が強く広がった形などに分けることもできる。

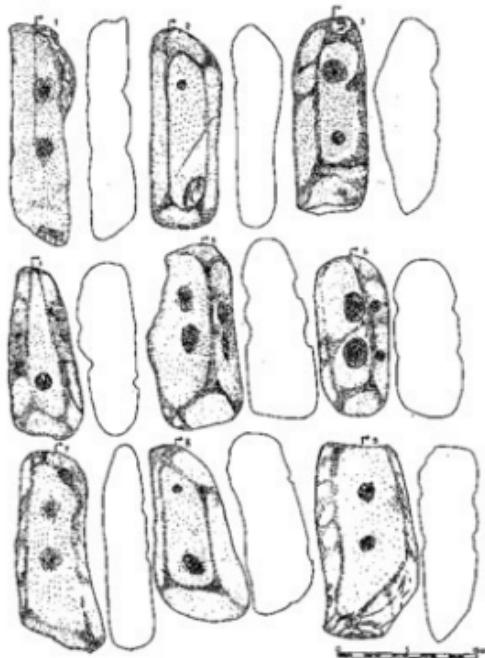
図14は細身の槍状のもので、1本だけであるが、他の大部分の刃部の広がった型式のものと違った使い方、たとえば石の多い土地を掘り起すというような使い方も考えられる。

100本のうち、出土した層位が、80cm以上の比較的深いところのものが約1/4で、あとは30cmから70cmのところから出土しているが、深さによっての形状のちがいは特にならないようと思われる。

（森崎健一郎）

（4）凹石（図版25、第24～26図）

第24図 凹石実測図（その1）



1. (A) 専用長方形型 (22個)

この型に属する凹石は22個中20個迄が硬砂岩でわずか2個だけが安山岩である。形は不整ではあるが基本的には長方形を保った自然のまゝの川原石（遠跡近くの南方を東流する唐沢川より採取したものであろう）を使用し、これらの石材の表面、側面の狭長な平面の中央部位をややはずれた場所に1孔または2孔、3孔を縦に併列して穿っている。（第24図の1～9）以上の如き凹石は最長なものは15.5cm（表1のA₋₃₀^{C~21}）、最大巾のものは7.8cm（表1のA₋₄₀^{B~16}）であり、目方の平均値は409.7g、厚さ平均3.6cmと言った數

値は使用者の使用目的の具現化を示す資料となりそうである。又凹孔の何れもが平面部のセンターをはずしてわずか両端よりの部分に穿たれているのも使用上の利点が存した為であろう。石材が硬質であることは研磨に不向であった為専ら单一専用の凹石本来の効能を果す結果となったものと考えられる。

凹孔は抉りの深いもの（第24図1, 3, 4, 5）と浅いもの（第24図2, 7, 8, 9）があり、浅いものは小刺突孔の集合体的なものであり、これが凹石本来の機能を果す行為中の痕か又は機能を達成させる為の

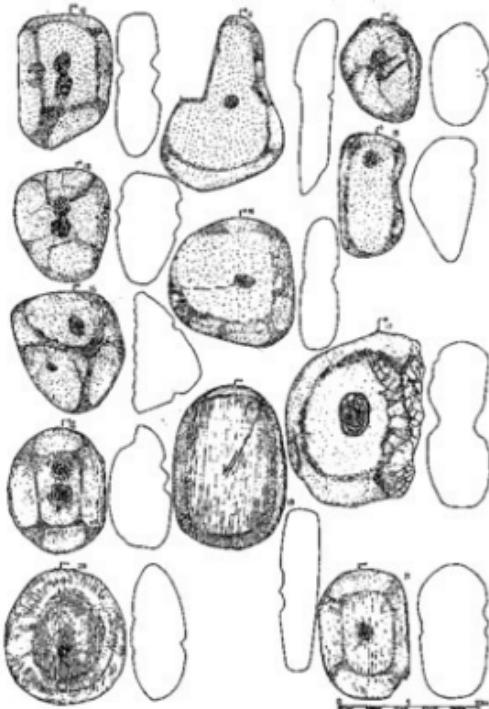
工程である穿孔作業の痕跡であるのかは一考を要するところである。回転度の明白に見受けられるもの（第24図4, 6）は刺突、敲き等によって生じた小孔を触受として回転拡大化された結果とも思える。凹孔の大きさ深さ等にも一定の限界が存在したとも見え直徑平均1.8cm(22個の平均値)である。おそらく1cmから2cm位が普通標準型と言えそうである。その為に同一石材に何ヶ所にも穿孔する必要が生じたのであろう。これらのことばは凹石全てに共通して言えそうである。

(B) 専用不整形型 (31個)

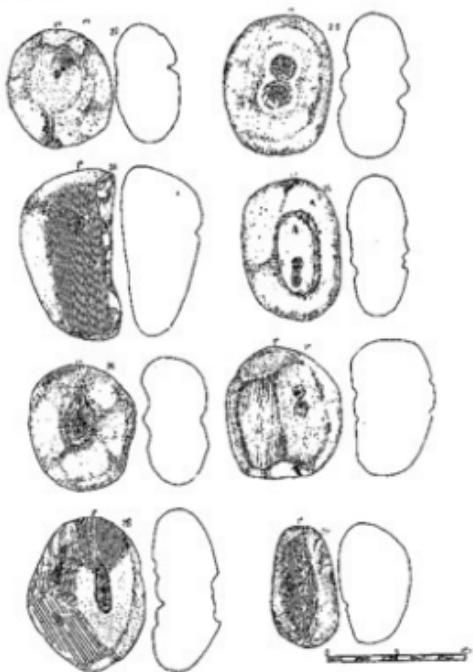
この型の凹石は自然に稜角の鋭さを失った様々の形の川原石を使って変化に富んだ形態であるが凹孔の穿たれた部位は共通して平面又は平面に近似した曲面を選んでいる。石質は總数31個中30個迄が硬砂岩製であることは前述の専用長方形型と同様研磨作業には不適当であったが為に凹石としての单一専用化したのであろう。（第25図10～17）。

形態は以上の如く様々であるが最長のもので縦15cm(表B, C～24), 最大巾を有する

第25図 凹石実測図(その2)



第26図 凹石実開図（その3）



もので9.9cm(表B, D~13)他は何れもそれ以下であり、31個の1個あたりの重量平均465g、厚さ平均4.4cmと言つた数値は前述の長方形型の平均値と極めて近似して居る。凹孔は2cm前後の径で表面、側面の平面部を選んで施され17は両面孔で抉りは深く回転痕が明らかである。

2. 磨石兼用型(29個)

凹石と磨石を兼ねたもので川原石を使用し石質は安山岩15個、軟質砂岩10個、花崗岩(ミカゲ石)4個であり、専用型とは異なり詰じて研磨に適応する石材を選んでいる点が注目される。(無作為に選んだのが偶然そんな結果になったのかも知れぬ。)

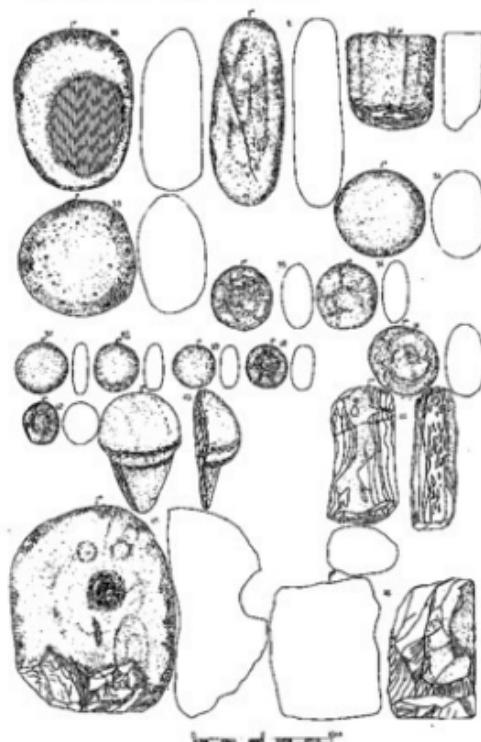
中でも全面に研磨度を有するもの(第25・26図, 18~23, 25, 26)・(表2磨石兼用型)は安山岩8個、花崗岩4個、軟質砂岩2個である。この全面均等研磨の現象を見ると凹石が主役で磨石が従属的であるのか、その逆となるのか主従の判断に迷うところである。表面には平滑なもの(第25図, 18~21)とやゝ粗な擦痕のもの(第26図, 23, 25, 26)の差が存する。聞く対象が異っていたのだろうか、即ち仕上と荒砥的な工程上の問題があったのだろうか。(土器研磨と石器類研磨の差異説、皮革なめし説もあり。)凹孔については専用のものと殆んど同様であった。

次ぎに全面研磨されているが局部的に研磨度の強弱の差の著しい凹石(第26図24, 27~29)・(表2, 磨石兼用型)がある。これは砂岩8個、安山岩7個で、局部研磨度強度なもの(第26図24, 27~29)は削去された擦痕面が、凹石本体をいくつかの多面体に仕上げている。24, 29は強度な部分研磨を受けて表面が削られ平盤状をなしている。26~28は削去作用を受け多面体化している。

(5) 磨石(図版25, 第27図)

1. 磨石専用型(15個)

この種のものゝ石質は安山岩¹¹質、軟質砂岩4個である。(図30~34)・(表1, 磨石第27図 磨石, 石棒, 砥石実測図



専用型)。安山岩は研磨用としては最適であったようである。

30は3号址炉址内より発見された安山岩の自然石であり、極端な局部研磨を受けて削去面が平滑になっている。

31は乳棒状で全面研磨である。全面研磨痕を有するものと局部研磨石とでは用途に差異が存したのだろうか。32は石斧の頭部を磨石として利用したものである。磨品活用の代表例と見たい33, 34は共に球状に近い全面研磨を施したもので、前者は安山岩質で両面の扁平部に磨耗痕が見られ素地は粒子の粗な自然石である。後者は砂岩質で全面町寧な磨きをかけた扁平球である。これら磨石は工作用具、調理用具等として使用範囲は多岐にわたったものであろう。

2. 小型磨石(9個)

この9個の小品は全て軟質砂岩質で素地はあらいが全面均等に磨かれた扁平な球体である。(図35~42)・(表2, 小型磨石)。9個のうち1例を除いては全て扁平であることは何かそれだけの理由があると考えて類例を他に多くもとめるべきと思う。

(6) 石棒(図版25, 第27図, 43, 44)

石棒は何れも頭部の部分を残す欠損したもののばかりである。(図43, 44)・(表, 石棒)43は縦筋状の節理のとおった緑泥片岩を町寧に研磨して仕立てており、縦に半截された頭部

第28図 石皿実測図



(8) 石皿（2個）（図版25、第28図）

安山岩製（図47の石皿）・（表、石皿）。これは箕形をなし口縁部近くで横に輪切りにされた如く切断され、又一側面が打欠かれている。皿面は口縁に向かって縱溝状に細い擦痕が併行して一面につけられている。皿面凹部は一様でなく打欠かれた側辺より巾約5cmの浅溝状の凹部が存するが、皿面の抵強的なものとも考えられる。底部、側面は整形研磨も加えられ、ことに底面には凹孔が3個存するところを見ると時には伏せて凹石として使用したこととも伺える。

他の安山岩製石皿（表、B12褐色土中）は縁辺部から皿面にかけての破片で全体の形態を知るには余りも小破片である。

大型凹石（1個）

軟質砂岩製（図45）・（表3 大型凹石）で供え餅形の上部中央に径3cm、深さ1.8cmの凹孔は同心円状の回転窓あり、重さは1780gもあり手でささえらるには誠に不向であるから搬え置かれて使用されたものであろう。

焼かれた凹石（24個）

火にかかった凹石24個の石質は砂岩、安山岩の川原石であるが、全て赤褐色又は褐色を呈し酸化し風化作用が進み割れ目、ひびが生じ欠損しているものばかりで、完全な原形をとどめるものはわずかに7個である。（表、焼かれた凹石）。凹石総数76個の中、24個が焼けていると言うことは火と関連した使用上の問題とのかわりを推察する材料となる

だけである。44は扁平棒状の粘板岩の側面を打欠き且つ調整して調整を加えた粗雑な作りで表皮を多分に残している。おそらく頭部であろうが製作途上のものなのかこれで完成品としたのか判断に苦しむ。

（7） 砥石（1個）（図版25、第27図）

砂岩製。（図46）・（表、砥石）。煉瓦大で、大きな岩石を打欠いた一部分を砥として使用したものでその面は現の如く平滑で赤褐色に変化している。酸化鉄の如きものが付着浸透した形跡あり。搬え置くには背部が不安定であるから背部を手でささえて使用したものであろう。

思われる。長野県考古学会誌曾利遺跡特集号の6・凹石の在り方、30P~31Pに藤森栄一氏は「すべての家にあった石器と考えるのが適当である。以下のところ、火鍛り作業に関連ある石ということに考えられているが、曾利の調査からは、これを肯定も否定もできないが、戸社に関連あるものが実に多く何か火に調達あるもののように思われる。しかし、何も火きりとの調達を考える必要はないのであって、火鍛具とすれば、火を一度おこせば、かなり長期間にわたって保たれたものと考えるのは常識だろうから数個も常設される必要はなさそうに思える。凹石の中には明瞭に火によって加熱されたと信じられるものがある。火に調達するものというより、むしろ、食物の加熱か調理に關係あるものと考えるほうが当を得ているのではないか。」と述べている。本址の凹石の場合も加熱された凹石の極めて多いことは曾利遺跡のそれと共通しており他にも類例が増加すれば凹石の研究は更に進化するであろう。

(中島豊晴)

3. 土器石器の材質

出土した石器片、土器片について、科学的な意味で考察してみると、
石器の石材は、殆んどが、原地付近から器ヶ峰のものであるが、ヒスイ（曹長石が多く
低品）は、青海～小鷹付近、石斧は、点紋縞泥片岩製で、妻日本の中央構造線に沿つた、三
波川帯のものである。このように、本州を横断して出現していることは、注目に値する。

土器片第(29图)について調べると、勝坂式は、後世の軸の前身とみらる、泥軸(俗称)が
0.1mmから厚いものは、1.5mm程、内外両面に、刷毛で磨られており、一部には、その泥
の中に着色済として、酸化鉄を多く含んだ粘土を使用していることが認められる。一般に
本体には、1mm以下の砂(石英・長石・小石)を多く含む粘土を使っているが、上塗りに
使ったものは、粒子が細かい。注意する点は、内部にはスが多く入っており(土器面とほ
ぼ平行なものが多い)、このスは、表面には出ず、泥軸の所で止っていることである。

このスが、何を意味するかは断定できないが、本体を作るとき、繋ぎとして入れた有機物
により生じたものか、焼成上生じたものか、今後の研究を要する点である。以上のこ
とから、勝坂式の或る物は、確かに、水密上、美的上、泥軸を本体が出来上ってから掛け
更に、その上に、細かい模様をつけた跡が認められる。水の透達速度は、表面を薄く泥
がすと、当然急速に早くなるが、個により差異がある。以上のことから、水密の必要上表
面加工には、工夫を凝らしてある。

加曾利E式は、勝坂式よりも、やゝ、材質、焼成温度などで劣り、刷毛目は認められる
が、泥軸を掛けてあるかどうか、断定はできない。水密の悪いものが多く、したがって、
風化を受けているものが、多くなっている。

第29図 ⑥加曾利E式土器断面

⑦下勝式土器断面



で長時間焼かれたことを示している。

いろいろ想像はできるが、その一つとして、簡単で一時的な窯を、石組で作り、必要な温度を得て焼き上げれば、大形の土器も方法的には可能であり、焼石の説明もできる。

(藤 義久)

4. 土製品・石製品

土製品は土偶7、円盤状土製品3、土鈴1、の計11点、石製品は垂飾品1、研磨された石1の計2点合計13点である。これらはいずれも縄文式文化に伴うものと考えられる。

1は頭部では脛体との接着部から欠損している。目、口は沈線で表現し、鼻はあるく

焼成温度は、加曾利Eは、やや低く、長石の粒がそのまま残っており、800度e前後かと思われる。勝坂の方は、個によって差があり、部分的にガラス質になっているものも見られ、石英が質変しているものもある。以上のことから、勝坂の或るものは、加曾利Eよりも高温で焼成されたとみられる。

次に、焼成に必要な温度を、如何にして得たかは不明であるが、勝坂の特に大形のものなど、露天での焚火程度では、不可能と思われる、そこで、実際はどうであったか不明であるが、ここで、可能な方法を考えてみると、土器窯の近くに、おびただしい焼石が出土し、この焼石をダイヤモンドカッターで切断したところ、多くは、中まで均質に焼けており、住居址の炉端の石とは、全々程度が異なり、高温

盛りあげたところを刺突し鼻孔を作っている。頭部両側と後頭部のヒダに直径約2.6mmの穴を開けているが、これは紐でつるすためと思われる。また首と肩をつなぐ穴は直径約2.6mmで頭上部まで貫通している。顔面は鼻の頭から右頬のあたりが焼けて黒く変色している。顔全体の感じは温かく笑っているようだ。(B 4出土)

2は胴体部で小さくまとまった出来という感じがする。正面中心線で対称に線刻されていると思わたる。左胸の突起は乳房を表現したものと思われ、体側部の腰より上にはかぎの手になった沈線、腰より下には2本の沈線が付されている。尻は出張っており、背中には逆ハート形の沈線が2重に付されている。胴体と足には心棒穴直径約2.5mmが逆人字形に貫通している。焼成は良好である。(E 17出土)

3は臀部で正面中心線で対称に沈線を付してある。腰がよく張り、尻は出張って、体腰部には2本の沈線があり腰上部で切れている。背面には逆ハート形の沈線が2重に付されている。胴体と足には心棒穴直径約3mmがあり、胴体を通るものは尻まで貫通して、右足を通る穴がこれにト字形につながっている。背、腰が部分的に焼けて黒く変色している。

(E 15出土)

4は胴体部で中心に乳の下までの隆脣を作り対称に2本の沈線を付し、とんがった乳房を無難作につけてある。模様は正面と側面にわずかあるだけで全体にあらけずりな作りという感じである。首をつないだ心棒穴は直径約2mmで乳の下まで通っている。また背面腰の辺とその欠損部が焼かれて黒く変色している。(D 16出土)

5は胴体部で胸の辺に指でおしてつけたと思われる凹みが1つあるだけで模様は一つもなく簡素な作りである。胎土には5mm位の砂粒を含みあらい。5と6は一緒に出ているが胎土、焼成とも違うので別個体と考える。(A 5出土)

6は腕部、1つは右腕が胴体接着部より離れたもので、ひじより先に羅文がところどころ付されている。腕のまがり具合は何かをかかえるような感じである。もう1つは腕先端部で右腕と対をなす左腕の破片だと思われる。(A 5出土)

7は足部で甲には5本の沈線、かかとには2本の沈線を付している。安定はよく裏面は平滑で心棒穴直径約2.3mmが貫通している。甲の部分と足首の欠損部が焼けて黒く変色している。(1号住居跡床面下25cm出土)

4および7は欠損したあと欠損部が焼かれて黒く変色している点が注意をひく。また7のような足については前回報告書で樋口昇一氏が『「足」のみの土偶と考えた方が良いのではないかと感じていた』としているが、私は立てて置く土偶の足として考えたい。甲の沈線は指を表現したというよりも1つの模様だと考えたい。いずれも決定的証拠はないので今後の発掘例に期待している。

土偶を時期的にみた場合、単純で粗雑→充実して繁雑→簡略化→抽象化という発展傾向があるなら、4、5を先に1、2、3、6、7を後におきたい。また形態的にみるなら、つるされるもの1、たおずかたてかけておくもの2~5、たてておかれるもの7、写実的で1~5、7と性格が異なるものを6と分けたい。

8、9、10は土製円盤で8(D14出土)は表面にくし状文をわずか残すだけで全面よくすりへっている。表面に比べ裏面のすりへりが少ない。9(B6出土)は表面に1本沈線を残し、側面はよくすりへっているが裏面はわずかなすりへりである。10(E14出土)は全面にすりへりはほとんどなく、表面の模様はそのまま裏面には焼附がこびりついている。胎土は1mm位の砂粒を含んであらい感じである。

11、12は石製品で素材はともにヒスイであり、11(B7出土)は垂節で弦にあたる側面に地肌の凹部をとろどろ残しているほかは全面よくみがかれている。また角になるところは面をとっており、穴は両側から穿孔されている。色は緑と灰白色のまだら文様でにぶい光沢をもっている。12(D12出土)は全面よくみがいてあるが素材の凹部がみがききれずあはたで残っている。愛玩石とでもいえる緑灰色のにぶい光沢をもつヒスイである。

13(B13出土)は土鉢で部分的に焼けて黒く変色している。全体に凹凸があり、振るとチャキチャキとかわいた感じの音がする。

以上13点で土製品は10、5を除いては胎土焼成とも良好である。またすべて第II地点の櫛文中期に属する部分から出土された。

(大久保邦彦)

5・自然遺物

(1) 骨角類

出土数の割合に資料があまりにも細片化しており、「種」の特徴を見出す手がかりがなく、「獸骨」の細片というほかはない。

しかし、鳥類も中型のものと思われる。

(2) 炭化物

別表にみられるように本遺跡では3地点からの出土があり、わけても第4号住居址中の倒立状態で発見された底部の中心を欠く土器の下から発見された完形品は「ミズナラ」の実であり(図版26参照)、該期の生産形態をうかがうに絶好の資料であると考えられる。

別表・第二次麻神遺跡緊急発掘調査出土物一覧表(炭化物、骨片)

No	トレンチ	種類	数量	備考
1	AT7	歯?	若干	8/1出土

2	B T 17	-65	骨	✓	8/3出土
3	B T 13	-76	骨	✓	8/3出土
4	B T 13	-65	骨	✓	8/3出土
5	B T 14	-85	骨	✓	8/4出土
6	D T 16	-40	骨	✓	8/5出土
7	B T 13	-90	骨片	✓	8/6出土
8	D T 9		骨片	9	8/7出土
9	B T 54	-75	骨片	若干	8/7出土
10	B T 14	-100	骨片	✓	✓
11	A T 3	-75	骨片	✓	✓
12	第3号住居址炉址内		骨片	✓	✓
13	C T 14	-75	骨片	✓	✓
14	B T 5	-95	骨片	✓	✓
15	揚げ土		骨片	✓	✓
16	第4号址伏せがめ下		炭化物	✓	含む完形品
17	第5号址		骨片	✓	8/8出土
18	第1号址炉址内		骨片	✓	✓
19	第1号址中央ピット内-80		骨灰	✓	✓
20	B T 5		骨	✓	✓
21	第5号址床上		炭化物	✓	✓
22	不明		炭化物	✓	✓

尚鑑定については骨角類を信州大学医学部第二解剖学教室助教授宮黒謙雄氏、炭化物については松本龍ヶ崎高校教諭森義直氏にそれぞれ依頼した。記して感謝する次第である。

(平林彌郎)

第2節 弥生式遺物

1. 土器 (図版23, 第31図)

弥生式遺物としては、Bの第5区を中心として出土した土器片のほかは、特記するものではなく、石器、土製品等の遺物は一片の出土もみなかった。出土量も少なく、図示したものの数は30片あまりしかなく、第1次発掘調査の際に出土した量よりやや少ない。時期的に見ると、弥生時代前半に相当するものではないだろうか。

第31図 弥生式土器拓影



a. 条痕文のあるもの（第31図1～7）

1、2はコの字重ねと、縦に羽状を施したもので、1は頸部に刺突文をめぐらせ、羽状に当るところでは、小さな隆起をもっている。口縁部は欠損しているが、ややソリをもつた口縁と、ハリをもつ胴部で壺形土器になるであろう。胎土は1、2ともに細かく、柔らかい感じの構成で、1には外面にかなりの炭化物の付着を残している。推定口径15cmである。3は複合口縁をもつもので、口唇に刻目をもち、頸部に荒い条痕をひいている。4は口唇に浅い刻目を、口縁部に斜めに条痕を施している。器形ははっきりしないが深鉢ではないか。5はやや趣の異なるもので細い条痕を不規則につけている。胎土は弥生式土器としては疎い方で、内外とも擦黒色をしている。6は縱横に交差する条痕文で、その区割の中には縄文を施してある。7は太い羽状の条痕のもの。1～4は松本市神林区の境窯遺跡より類品が出土しているが、時代的には前期前半、他はやや時代が新しいと思われる。

b. 列点文のあるもの（第31図8～10）

8は口縁に押し引きのように列点を施し、下部にも疎い刺突があるらしい。9は上部の直径5cmの小型の土器で爪形状の列点と沈線を施し、太いくびれ状の沈線により、二段に分けられている。破片は底部まじかと思われる器形は直線的な体ではないか。胎土は細かく黄褐色を呈している。10は浅い沈線で囲んだ中に爪形状の刺突をつらねている。径は約30cmの甕形あるいは壺形の土器と思われる。これらも時代的には前群と同時期であろう。

c. 繩文のあるもの（第31図11～16）

11は口縁に縄文を施し、その上から2条の沈線を山形状に引いて、沈線の集まるところに乳頭状の隆起をつけている。口唇には縄文を、口頭には細く爪形の刺突文を施し、壺形を呈するものと思われる。類似するものは境窯より出土している。12～14は縄文と沈線文との組合せ。15は大型甕の頸部で直径28cmと推定される。浅い太い沈線で二重の円と平行沈線文を描き、上部に縄文を施している。胎土はやや粗く石英か白い細粒が目立ち、焼成もよわい。器外面には煤煙が付着し、内面も黒色および黒褐色を呈する。器面の開口部は外側はなめらかであるが、内面は指痕のあとと凸凹がみられる。16は列点と縄文の口縁部で内側するとともに、上から見るとゆがんで、片口ではないかとさえ思われる点がある。器形は不明。

d. 底部（第31図17、18）

二点しか出土しなかったが共に無文の底で器面も無文である。17は特に底が薄いのが目につく。色調は前者が黄褐色、後者が茶褐色である。

（神沢昌二郎）

第4章 結語

今回、発掘調査された地点は、昨年調査の第2地点の東北に僅かへだてている。土地の人達によると、昨年調査地点の東、約15mに、南北約20mの間に住居址と思われる遺構が4ヶあったというから、おそらく、この三者全域が中期縄文期の集落址として一つの範囲を形成していたものだろう。昨年の調査で西の限界の一部、本年の調査で東の限界が知られた程度なので、この集落の全容が浮影りにされた訳ではないが、2回の調査では、昨年確認されたもの8戸、今回調査のもの6戸、その中間地帯のものが住居とすれば、合計18戸となり、未調査の分も加えれば、30戸前後の住居数は充分に考えられる。勿論、この数字が同時にあったのではないことはいうまでもない。先づ、本年調査の住居址についてみよう。その特徴は、平面プランは、第1号住居の場合圓丸方形的なもの、第5号住居の場合円形である。これに対し、昨年調査のものは第3号住居が円形、第1・第4号住居は円ないし円に近いと推測され、特に第1は圓丸の円形に近い方形プランとも推測されていて、必ずしも、定形的なものはない。柱穴は、第4号住居の場合5ヶであるが、他の場合わからない。昨年調査のものは第3号住居が4ヶとなっている。炉は、第1・第3・第5号住居の場合砾石をもつ竪穴炉をなし、第2号住居の場合地床炉となっている。なお、前者の時期は加曾利E II式に比定され、後者はその切り合いの状況から上述のものより古い。昨年調査の分では、第1号住居は竪穴炉、第3・第5号住居は砾石をもつ地床炉となっている。本年の場合は、地床式から竪穴式へと移っているが、昨年の場合は、必ずしもそうとは限らない。なお、第3・第4・第5号住居とともに埋甕があって、第3・第4は口縁部を下に座部を上に即ち逆位の状態に、第5は正位の状態にある。第3・第5の土器は加曾利E II式に比定されるもの、第4は巻坂式に比定されるものである。

次の遺構は、凹穴群・配石などをあげることができる。

A・Bの4~7グリットの範囲に、大小13ヶの凹穴を数えた(図版9、第4図)。調査者の小松氏は、柱穴址と考えられるものについては褐色土のなかに床面をもって住居の存在も考えられるとし(昨年もその例あり)、それ以外のものについては界祭の場の遺構として考えてはどうかといわれているが、結局、局部的な調査では結論はできないとされている。

ここでは、もう少し、積極的に、凹穴のある場所が第2地点いの住居群とろの住居群の間に介在したこと、ある凹穴には土偶或は土器などの破片があったこと、翡翠の装飾品の出土したこと、焼土の存在(儀式の存在)したことなどを傍證的事実として、墓穴(土塚

）群ではないかと考えてみたい。

この場合、凹穴の大きさは（穴状遺構表参照）、小なるものは、径35×35cm、深さ20～27cm、大なるものは、径120×200cm、深さ95cm、平均的にみれば、径、深さともに70cm内外のものである。

勿論、これらの大小の凹穴を墓穴（土塚）と考えた場合、当然、その葬法が考えられてはならない。大なるものは、成人の屍体を納めることができるが、小なるものは、小人はよいとして成人の屍体の場合は何らかの変更が加えられて収容ができる状態になったものでなくてはならない。その場合は、一次埋葬ないしそのまま放置して（風葬）骨だけになったものを埋葬する場合にのみ可能である。民俗学でいう風葬（洗骨も）二次葬制と呼ぶものである。

B 9では、地表下40cmに拳大ないしそれより大きい躰10数ヶが散在していた。

人為的なものであることはわかっても、その意図するとところはわからない。

この外、埋葬の問題がある。埋葬については、貯蔵、埋葬、信仰説などがあり、信仰説では、胎盤ないし臍帯を埋めて死児の転生を願ったもの、土器内に包まれているものを孔を通じて外に出すと同様に壁穴に充満している惡蟹を壁穴外に発散させる一つの呪術行為などという考え方などがある。この遺跡の場合、貯蔵説は考えがたいので、埋葬説ないし信仰説が考えられる。5例のうち、正位のもの3例、逆位のもの2例で、両者には性格の差があるように思われる。殊に、逆位のものは、底部の打欠いたものと穿孔したもののあることである。打欠くことと穿孔することとの間に相違はないものだろうか。ここでは、両者の相違を明らかにすることはできないが、両者の間には微妙な違いがあるのではないかだろうか。第4号住居出土の伏蓋からは骨片の散片が出土したこと、人骨か他の動物の骨か、やがてはその内容を明らかにできる資料が出土することを期待したい。

しかし、第2地点のろの西端にある凹穴が土塚であるとすれば、それは、成ないし年長の人達の埋葬地であって、住居内から発見された埋葬のうち、埋葬に使用されたものがあるとすれば、その対象は、死産児ないし生まれて間もなく死んだ児を葬むったものに違いない。その場における肉親の感情がそうさせたと説く。勿論、それが胎盤や臍帯であっても、死児転生を願うことには至らない。

貝塚所在地にみられる後、晩期の葬儀はこの系譜を引くのではないだろうか。そしてその起原的なものは松本平では前期未迄現れることができるのではないかと思われる。

住居内に、この種の埋葬のあるのは、より身近にと願うからでもあるだろうが、専ら邪靈の近づくことを恐れているからでもあるようである。ただ、乳児期に死亡率が高かったと想われる、或は、死産児も多かったと思われる石器時代にしては、発見される埋葬が少

何故だろうか。県内を例にとっても、発見された住居数と埋葬数ではかなりの差がある。住居内の埋葬は、埋葬に限っても、特殊な場合であったことが知られ、信仰の場合であることも充分考えられ、場合によっては貯蔵の場合もあって、一律に注解することはできない。

出土遺物の上からみると、縄文土器は11類に分類したがその主体は加曾利B式土器にあり、殊に、その中ごろないし末ごろの土器が中心らしい。前期ないし後・晩期土器は、極めて断片的ないし微々たるもので、これは昨年も同様で、昨年と今回との調査の限りその居住の反影とみることはできない。むしろ、他の地点にその住居があって、何かの機会に紛れ込んだものといわなくてはならない。これに対し、勝坂式（阿玉台式）、加曾利B式土器は、正しく、この地点に居住した人達の生活遺産と考えなくてはならない。なお、縄文土器のうち、第4号住居址から出土した「伏堀」に用いた壺形土器は、その器形の上からは特異なものといえよう。

石器のうちでは、①打製石斧と凹石の多くあること、②石鎌と石臼の少ないとが、この縄文時代人の食生活を考える上で示唆に富むものがある。この傾向は、昨年の調査でも同様であった。このうち、打製石斧の多いことは、土掘り具としての性能を考えると理解できるが、凹石の多いことの説明は困難である。凹石の性能が発火のため、堅果を殻すためといつても、住居の数に比しやや多いように思われる。これに比し磨石、石皿などは、むしろ、少なすぎるのではないかだろうか。土掘り具としての用途が打石斧にあるとすれば、その取扱物を処理するための石皿・磨石特に石皿は、少なくとも、住居の数だけでも出土してもよいことになる。

なお、石鎌と石臼の少ないとは、場合によっては、動物性食料即ち獲物の少なかったことを意味し、その処理の機会の少ないと意味する。だが石鎌が少ないとがそのまま動物の獲得が少ないということにはならない。というのは、小動物などは殊にワナなどの捕獲によることが多かったのではないかと思われるからである。

なお、土鈴の発見は、塙尻市焼町を除いて梓川、波田西村に集中し、注意される。その用途中は信仰上のものではないだろうか。

なお、調査委員森義直氏が堆積の上から当時の年代を推定したのは一つの観方で今後資料の追加が期待される。

(藤沢宗平 1973.1.17 信大の病室で)

凹石一覧表

1. A 専用長方形型 (2210)

シリット	縦 横	厚	形	石質	重さ	孔数	備考
B 11 -50	7.9×4.8	2.5	長方形	砂岩	200	両面孔2ヶ	自然の川原石
B 15 -70	11.2×4.3	4.2	+	+	385	両面孔2ヶ	硬砂岩川原石
B 12 -42	15.4×7.1	5.0	+	+	770	片面孔2ヶ	両光端光細りの形の川原石
1 B 13 -105	15.4×4.0	3.0	+	+	390	両面孔2ヶ	中央の平面部=凹孔端にならぶ
0 B 11 -40	13.3×5.2	3.3	+	+	440	片面孔1ヶ	裏面は浅い削りあわせている
6 B 13 -65	11.4×5.6	4.3	+	安山岩	400	両面孔2ヶ	自然平面部にZ孔をつぶす
B 16 -40	14.3×7.8	6.0	+	砂岩	800	片面孔1ヶ	背面斜面はふくらみ
A 4明 -20	10.8×6.6	3.9	+	+	420	片面孔1ヶ 反面孔2ヶ	硬岩の自然石
C 21 -30	15.5×6.0	3.2	+	+	425	片面孔2ヶ	両端や光細りの形
D 15 -40	10.4×4.7	3.2	+	+	290	両面孔2ヶ	硬質川原石
D 13 -55	6.8×4.9	4.4	+	+	280	両面孔2ヶ	川原石の自然のものを利用
3 D 15 -80	14.3×4.6	3.9	+	+	470	片面孔2ヶ	+
5 D 15 -80	13.2×6.0	4.8	+	+	550	三面孔2ヶ	斜面部はするどい平面部がいくつもあらわれている
D 16 -40	7.1×5.2	3.0	+	+	220	両面孔2ヶ	中央部より切断されていて
E 12 -80	12.4×4.8	3.7	+	+	320	両面孔2ヶ	川原表面の両面はくわれていて
E 14 -25	6.6×4.8	3.7	+	+	130	両面孔2ヶ	硬砂岩の川原石
7 E 2 -110	14.8×4.0	3.3	+	+	510	両面孔2ヶ	硬質のためか凹孔は浅い
2 E 15 -70	14.2×4.9	2.8	+	+	420	片面孔2ヶ 反面孔1ヶ	+
E 15 -40	11.2×6.0	3.7	+	+	400	最大平面部 =13cm	+
1号底 底面-30	12.9×5.7	4.1	+	安山岩	535	両面孔2ヶ	+
1号底 底面-60	12.9×5.7	2.8	+	砂岩	405	片面孔2ヶ 反面孔1ヶ	や、青味をふくむ川原石
1号底 底面-80	9.3×5.0	2.7	+	+	225	両面孔2ヶ 反面孔2ヶ	小・少孔質の川原石

B 専用不整形型 (3110)

シリット	縦 横	厚	形	石質	重さ	孔数	備考
A 7	12.6×6.4	4.2	2.3cm大	砂岩	460	両面孔2ヶ	定形
A 7	8.7×4.8	4.6	不整形肉	+	300	片面孔2ヶ	+
A 5	11.6×6.8	5.5	+	+	470	底平部1ヶ	川原石の最大平面部=凹孔あり
15 A 7	9.5×6.4	4.1	正整形成六面体	+	380	最大平面部 正整形成六面体の形状は通常甲板 で複数の面に凹孔	1.4m
B 4 -40	8.6×8.4	3.5	丸いC字形	+	370	両面孔2ヶ	1部合欠損
B 8 -88	7.6×6.5	5.2	U字形	+	210	側面孔1ヶ	丸形

B 13 -80	11.8×8.7	7-1 長方形的	砂岩	1140	二面各2Y 一面3L1Y	川原石
B 16 -72	7.8×7.5	4-3 三角形	+	365	側面孔1Y	+
B 13 -90	10.2×6.0	3-2 偏方形	+	360	片面孔1Y	先端欠損
B 8 -31	7.7×7.3	4-2 烟斗形	+	310	兩面孔各1Y	先端1部欠損
B 8 -25	11.6×5.4	4-4 精肉半截	+	240	片面孔1Y	1部合欠如
B 8 -49	15.5×2.0	6-2 蛇首形	+	690	+	+
12 B 7 -52	7.2×6.3	4-9 Y字形	+	270	+	寬形 2-3cm 大の川原石
B 13 -85	9.4×6.6	3-1 精肉	+	350	+	寬形
B 12 -65	7.6×6.8	4-7 不整四角形	糙毛無	370	一面3L1Y	+
13 C 16 -70	7.9×6.9	4-5 滑頭形	砂岩	340	兩面孔各2Y	川原石で較量で劣る
C 14 -85	11.4×9.4	5-5 偏扁精肉	+	640	底面孔3Y	川原石で自然の角を保たむ
C 16 -85	11.8×8.2	5-4 小ちく形	+	690	兩面孔各1Y	+
14 C 17 -65	8.9×8.7	2-2 烟斗形	+	360	+	手板は各変形を有す
C 14 -90	12.8×7.1	5-0 偏精肉型	+	720	兩面孔各2Y	寬形
C 24 -85	15.0×7.8	5-5 ひよろく形	+	1080	+	比較的大型品
C 21 -25	8.9×8.9	5-0 三角形	+	290	三面孔各1Y	三面の凹孔は何時も深い
15 C 14 -75	12.4×8.2	2-1 初子形	+	640	片面孔1Y	手板状で引いた面は選別を行はれて、平面化をほのかに施す
C 16 -75	9.0×5.5	5-3 四角形	+	440	片面孔各2Y	寬形
C 24 -60	11.8×7.2	5-0	+	720	片面孔1Y 及面孔2L1Y	片面の1孔は深い
16 C 12	9.0×6.4	4-9 不整形鉤形	+	320	片面2Y及面 孔3L1Y	手盤と鉤形試
D 14 -60	8.8×5.3	4-2 不整近正三角形	+	375	兩面孔各1Y	三角形の底辺は直角で頂部は更に凹曲形で何時も底辺より
D 14 -35	5.6×4.0	4-9 小ちく形	+	160	側面孔1Y	小形品
17 D 13 -35	12.0×9.9	5-6 精肉半截形	+	820	片面1Y及面 孔各2Y	平たい先端と底辺は複数している。
E 16 -80	11.4×7.9	3-7 初子形	+	545	兩面孔各2Y	寬版品
5.5cm 高さ内	11.6×5.6	4-0 精肉半截形	+	260	片面孔1Y 及面孔2L1Y	片面の1孔は深い

2. 磨石兼用型 (29) 全面研磨にのみもの14。部分的に強弱の差は全面研磨したもの15。

高さcm	縦横cm	厚形	石質	重さg	孔數	備考
22 A 3 -80	8.3×7.2	4-9 90°形	安山岩	420	兩面孔各1Y	全面磨痕あり。下部先端欠損。 =小打痕。
A 7 -80	9.3×8.0	5-2	+	580	兩面孔各1Y	全面研磨後、側面は中程度 まで凹孔は残り多くある。
23 A 7 -20	10×7.9	4-9 精肉	+	520	側面孔各2Y 片面孔各1Y	側面上下を削り、(細い)小凹孔は山あり 斜めの底辺は浅い。
26 B 13 -25	8.7×6.6	4-2 不整肉半截 半盤	砂岩	420	片面孔1Y 片面孔2Y	片面孔深さ1mm。全面磨痕あり
20 B 8 -69	9.0×8.5	4-2 不整肉半截 半盤	滑面石	530	兩面孔各2Y	全面研磨。側面はわずか前面 の研磨跡がある。
B 13 -67	10.6×9.3	4-2 精肉形 半盤	安山岩	630	片面孔2Y 及面孔3Y	横4.4cm、奥行き2.6cm、重さ4.3kg

25	B -85	9.6×7.2	4.7	円形	安山岩	680	片面孔各2	全面剥離と手子は何れも薄い側面は よく剥離する。
	B -85	9.7×8.1	4.7	精円と半球	砂岩	555	+	全面剥離の付箇部から正面丸味を失 す場合である。全面剥離はそれにつき、 半球部は半球部の付箇部より剥離が進む 場合がある。
19	B -70	11.3×7.8	2.8	精丸と精円 砂岩の付箇部	安山岩	260	片面孔2	全面剥離と半球部の付箇部より剥離 が進む場合がある。
20	端上 内2	8.8×6.7	3.5	精丸丸味あり	+	360	片面2	全面剥離と全面剥離の正面は半球 部の付箇部から剥離する。
C -60	10.3×9.4	5.1	円形の近い 斜面	斜面石	445	片面各2	全面剥離と全面剥離の正面は半球 部の付箇部から剥離する。	
D -65	10.7×8.2	5.1	精円凹内	安山岩	655	片面孔2	全面剥離と全面剥離の正面は半球 部の付箇部から剥離する。	
21	E -45	9.4×6.4	5.1	精丸凹内	斜面石	545	+	全面剥離の正面は半球部と全面剥離をなす 場合。
22	端上 内2	12.3×10.4	5.9	端面斜面形	+	550	片面孔各2	以上14個は砂岩と安山岩を累せて 全面剥離面の底を斜めにする。
24	A -70	11.7×6.5	6.0	不整長軸	砂岩	640	片面孔1	全面剥離面の底を斜めにする。
A 7	8.4×8.0	5.9	細長・偏平 石の付箇部	斜面石	510	片面孔2	全面剥離面の底を斜めにする。	
B -53	9.7×7.5	5.6	球形	安山岩	380	片面孔1	全面剥離面の底を斜めにする。	
B -105	6.1×4.9	4.8	不整精円形	砂岩	190	片面孔1	全面剥離面の底を斜めにする。	
B -80	6.1×4.7	4.6	難辨形	+	170	片面孔1	全面剥離面の底を斜めにする。	
B -85	7.7×6.6	2.8	偏平精円形	安山岩	170	片面孔各1	全面剥離は一面面の剥離度大である。	
C -60	10.1×8.7	5.7	精円 (付箇部)	安山岩	540	片面孔各1	全面剥離の底面は全面剥離の底面に接する 形態。傾斜部は全面剥離部であり。	
C -60	11.5×10.0	5.0	不整形 精円	+	820	+	全面剥離部と傾斜部の底面は全面剥離 の底面より傾斜する。	
D -70	13.1×5.5	1.8	長軸扁平形	安山岩	280	片面孔各2	全面剥離部と傾斜部の底面は全面剥離 の底面より傾斜する。	
D -62	7.5×5.4	6.2	半球形	+	230	片面孔1	全面剥離部と全面剥離の底面は全面剥離 の底面より傾斜する。	
D -40	9.0×5.0	4.2	不整四面体	砂岩	255	片面孔各1	全面剥離部と全面剥離の底面は全面剥離 の底面より傾斜する。	
27	E -65	9.8×8.5	5.9	端頭形	+	660	片面孔2	全面剥離の底面は全面剥離の底面より 傾斜する。
28	端上 内2	10.9×8.3	4.7	崎突形	+	520	片面孔2	全面剥離の底面は全面剥離の底面より 傾斜する。
29	端上内	8.1×5.3	4.3	237形	+	265	片面孔各1	全面剥離の底面は全面剥離の底面より 傾斜する。
No.11	9.2×6.9	4.8	237形	+	210	片面孔1	全面剥離の底面は全面剥離の底面より 傾斜する。	

以上15個は砂岩と安山岩を累して全面剥離の底面は
全面剥離の底面は全面剥離の底面より

3. 大型凹石 (端面のみたと見られるもの) 140

	厚	形	石質	重さ	穴の数	備考	
45	A 4 Pc 内-120	15.1×11.8	7.7	球半球形	砂岩	1780	上部1孔下2孔 全面剥離部の頂上部四面体を呈する。 全面剥離部の頂上部四面体を呈する。

4. 球状丸い凹石 (24個) の中川は奈良型兼用型と全く合ひません

A -85	9.4×8.1	4.7	長円形	砂岩	830	片面孔1	長円形は長円形であらわせるのが中央部 で付箇部がある。
A 7	7.2×5.3	4.6	帶形不明 欠損大	+	240	片面孔2	全面欠損して危険化し易知部大
A -70	8.1×6.3	4.7	不整圓形	安山岩	330	+	四角形部分が自然石 滑面孔2
B -100	12.0×10.3	5.9	片側孔欠如	砂岩	830	+	全面欠損して危険化し易知部大 全面欠損して危険化し易知部大

B 1 -95	8.5×4.2	1.6	半球及凹凸 二重形	砂岩	820	片面LIT	塊状(火薙部大堅物半明)
B 7 -40	7.8×7.6	4.3	長円形	+	390	+	堅物(火薙部の火薙石)半堅物(火 薙石)等の内に多量の火薙石(堅物)
(B) 5 -16	10.9×5.4	4.0	+	+	580	片面LIT	堅物(火薙石)等の火薙化し(堅物)等の 堅物(火薙石)等の上部火薙(火薙火)等の 火薙色。
B 13 -180	11.3×8.2	6.0	+	+	680	片面LIT	堅物(火薙石)等の火薙化等の火薙色。
B 17 -18	7.5×6.3	4.3	三角山形	+	320	+	正面上部を有する(上部火薙)火薙化等。
(B) 17 -28	11.2×9.0	4.8	正角形(火薙形)	+	650	片面LIT	正角形(火薙形)等の火薙化等の火 薙(火薙形)等。
B 12 -33	8.2×7.6	2.6	堅物(火薙形) 現在(火薙形)	+	380	片面LIT	堅物(火薙形)等の火薙(火薙形)等の火 薙(火薙形)等。
B 13 -75	10.5×5.3	6.7	錐形等 等の形	安山岩	375	片面LIT	錐形等の火薙(火薙形)等の火薙(火 薙形)等。
(B) C 17 -38	10.7×6.8	3.8	正角形	砂岩	460	片面LIT	正角形等の火薙(火薙形)等の火 薙(火薙形)等。
C 24 -69	8.6×6.9	5.0	原形不明	+	460	片面LIT	全面火薙化(相間) 半面火薙(全面不明)
(C) C 17 -19	9.8×7.4	4.3	橢円形	+	480	片面LIT	赤褐色(火薙)全面(全面平滑)
C 18 (火薙面)	11.4×7.6	7.1	堅物(火薙形)	+	760	片面LIT	塊状(火薙)等の火薙(火薙形)等の火 薙(火薙形)等。
C 14	11.6×8.2	3.2	小斜面等形	安山岩	205	片面LIT	小斜面等形の火薙(火薙形)等の火 薙(火薙形)等。
D 18 -80	6.8×4.7	4.0	原形不明	砂岩	225	片面LIT	赤色(火薙)等の火薙(火薙形)等の火 薙(火薙形)等。
D 15 -45	7.9×7.1	7.2	満頭形	+	460	片面LIT	丸石の凹頭部分を利用して火薙(火 薙形)等。
(D) D 6 -50	12.1×9.7	6.9	火薙(火薙形)	安山岩	320	片面LIT	全面火薙(火薙形)等の火薙(火 薙形)等。
(E) E 13 -70	9.2×6.3	4.1	橢円形	+	485	+	褐色(火薙)等の火薙(火 薙形)等。
E 16 -50	9.8×7.4	4.2	+	+	420	片面LIT	褐色(火薙)等の火薙(火 薙形)等。
E 15 -28	9.0×7.0	4.6	長円形	砂岩	400	片面LIT	赤色(火薙)等の火薙(火 薙形)等。
(E) E 15 -50	10.8×5.6	4.6	正角形 (火薙形)	+	320	片面LIT	断面火薙(火薙形)等の火 薙(火薙形)等。

以上24個(仕上火薙)の磨石(磨石)は、火薙(火薙形)等の火薙(火
薙形)等の火薙(火薙形)等。

磨石一覧表

1. 磨石専用型 (専用型(火薙石)の中心入火) 15個

番号	規格	厚	枚	石質	重量	研磨面	備考
A 2 -55	7.8×7.1	5.5	球形	安山岩	420	全面研磨	軟管(火薙)の粗粒(自然石)
B 14 (火薙内)	9.0×6.8	4.7	橢円形	+	400	+	片面火薙(火薙)の粗粒(自然石)
B 5 -43	6.8×5.4	4.6	錐形(火薙形)	+	230	+	粒子粗り軟管(自然石)
B 14 -90	6.9×5.6	4.0	+	砂岩	220	+	青味(火薙)の粗粒(自然石)
B 13	15.0×10.0	10.0	大型球形	安山岩	4000	+	石頭と圓盤(火薙)の火薙(火 薙形)等の火薙(火 薙形)等。
33 C 17 -60	8.5×8.2	5.5	橢円形	+	560	片面研磨(火 薙)	軟管(火薙)の粗粒(自然石)
C 15 -70	9.9×8.0	4.0	+	花崗岩	425	片面研磨	片面火薙(火 薙形)等の火 薙(火 薙形)等。
D 15 -20	2.7×5.1	3.2	偏平橢円形	安山岩	170	全面研磨	全面火薙(火 薙形)等の火 薙(火 薙形)等。
D 15 -70	9.7×6.6	4.6	橢円形	+	435	+	火薙(火 薙形)等の火 薙(火 薙形)等。

34	E 15 -40	6.4×5.7	3.8	偏平球形 砂岩	195	全面研磨	丁寧に磨き上げてある。
	E 13 -52	6.5×4.5	3.8	円半球形	+	175	+
	E 13 -110	12.8×6.2	4.1	偏半球形 安山岩	530	+	緻密硬度の自然石 5号砂纸上
32	E 15 -60	6.8×6.1	3.1	+	+	235	+
31	1号 -60度面	12.8×8.8	2.5	棒状	+	330	+
30	5号 炉渣内	11.3×8.1	4.2	橢円形	+	640	輪削面 2° 2×強(標準)

以上 1号 3号 5号 E 13 E 15 1号 60度面の 棒立状態の自然石を剖面にて。

2. 小型磨石 9個

36	B 17 場上内	4.3×3.9	2.2	偏平円筒形	砂岩	70	全面研磨	斜手に粗い角立の磨きあわせ
35	B 13 -65	4.5×4.1	2.3	+	+	95	+	+
41	C 15 -75	4.9×4.5	2.7	+	+	90	+	+
30	E 14 -35	3.1×2.9	1.8	+	+	45	+	+
42	E 15 -60	2.8×2.6	2.5	+	+	85	+	磨石の如き内盤状の小石
37	1号 -65	2.4×2.4	1.4	+	+	45	+	+
39	+	2.8×2.8	1.4	+	+	35	+	+
40	I 27 2号	2.8×2.9	1.9	+	+	40	+	+
本略10所 場上内	4.2×4.0	2.6	球形	+	100	+	球体	

以上 9個は全く砂岩製で球体 様内盤状等全く平滑な研磨仕上げ。素朴口音 粗質の
石块 1号 60度面

石棒 2個

	ワット	縦 橫	厚	形	石質	重さ	備 考
43	E 30 -78	2.3×3.9	3.2	石棒頭	輝光岩	190	左側位上端丸頭部横に半鏡玉孔孔口下次如
44	C 14 -55	9.5×6.3	2.4	+	泥質 頁岩	220	打鍛毛細孔2孔粗製品で研磨は如く上端ノボル 表面凹凸有り。

砥石 1個

	トレーナー	縦 橫	厚	形	石質	重さ	備 考
D 16 45	9.7×8.1	6.4	長方形	砂岩	330	研磨毛打鍛孔2孔一箇所左側孔口直角使用 研磨は研磨は小中等。	

石皿 2個

B 12 場上中	8.0×6.2	6.4	口縁部 破片	安山岩	390	石皿破片 帆船不明 口縁部上端圓孔2箇所有 船形火薬桶外縁
A 7 -50	20.9×26.0	8.9	前縁部 足部分	+	7,000	細口縁部横に火薬孔2箇所火薬桶外縁

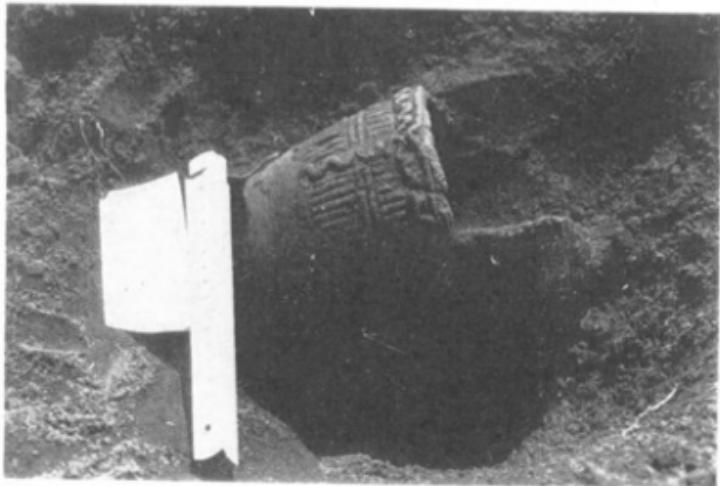
注、写真名左欄。数字は引抜因版記載の石器番号表示す。



B 16, 17グリット



第3号址から西方



C 17よりの深鉢出土状況



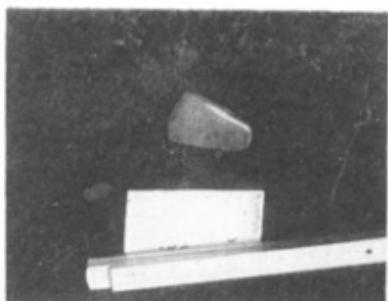
B 15 遺物出土状況



B 16周辺における土器だまり



弥生式土器出土状況



磨製石斧出土状況（上・右）



つり手土器出土状況



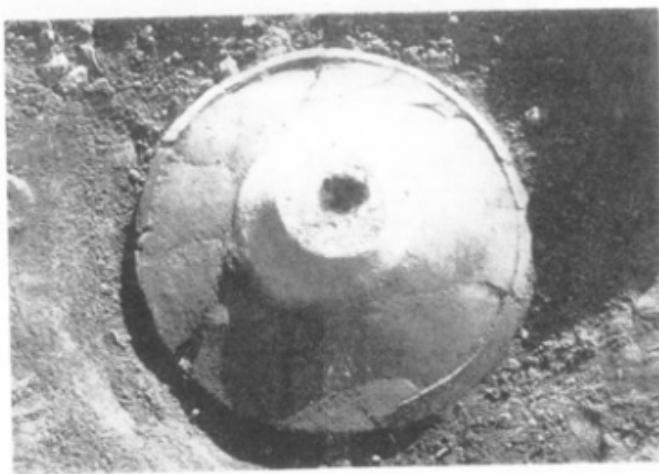
つくね土器出土状況



A7. 石皿出土状況



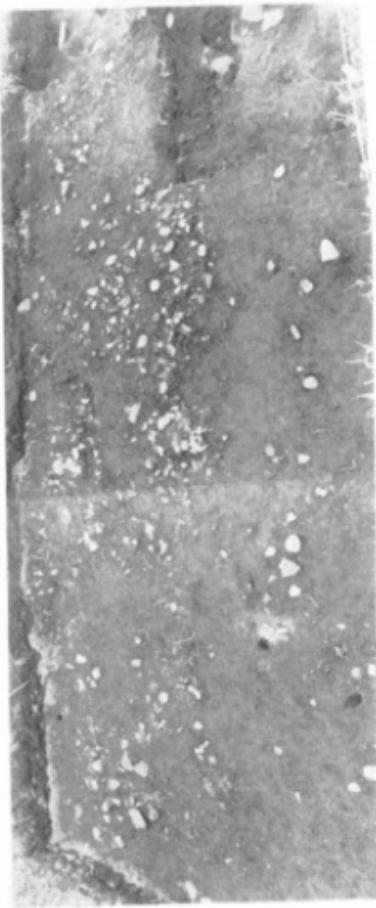
第3号址 埋 葬



第4号址 伏鉢

第5号址 堆甕

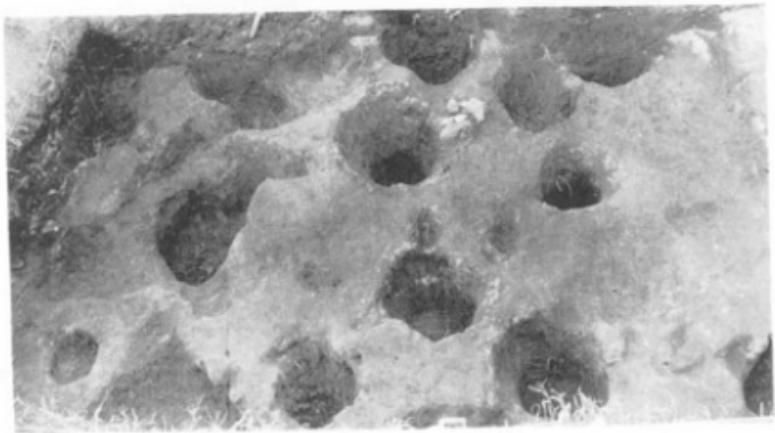




第5図(右)
南より見た遺物出土状況

第6図(左)
北より見た遺物出土状況

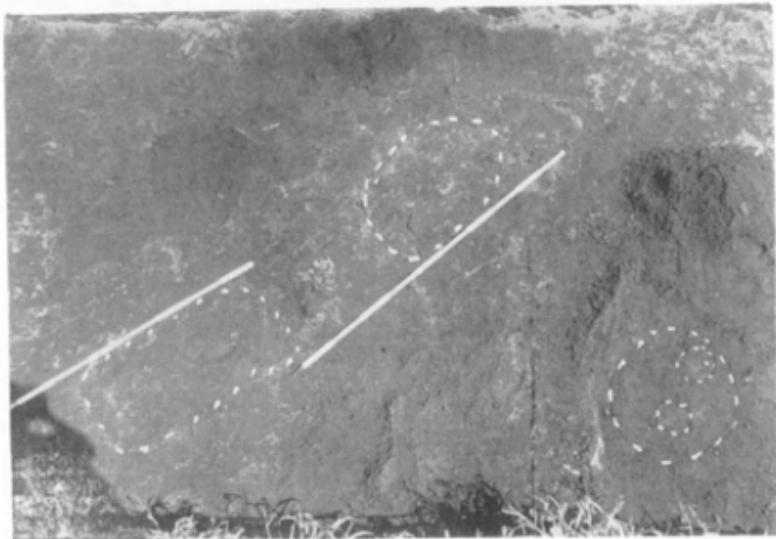




第2図南より見た穴状遺構

第3図西より見た穴状遺構





A 5 周辺焼土



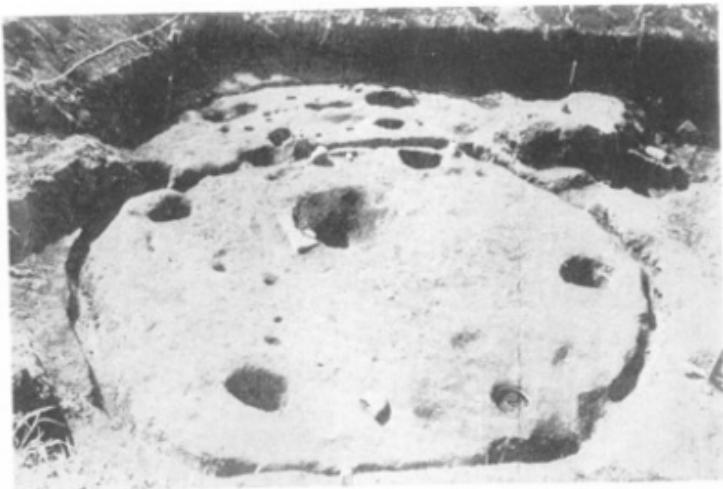
第1号址炉址



第1号～5号 住居址



第1号 住居址



第3・4号住居址



第5号住居址







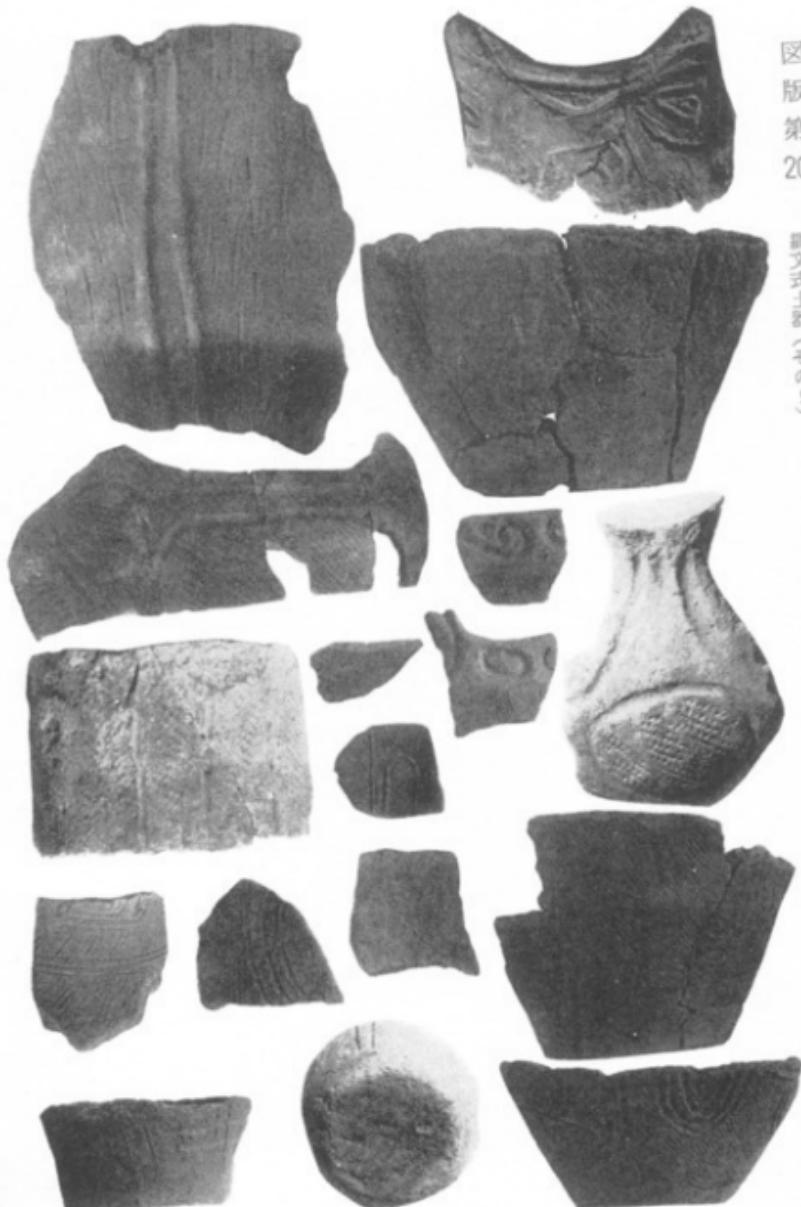


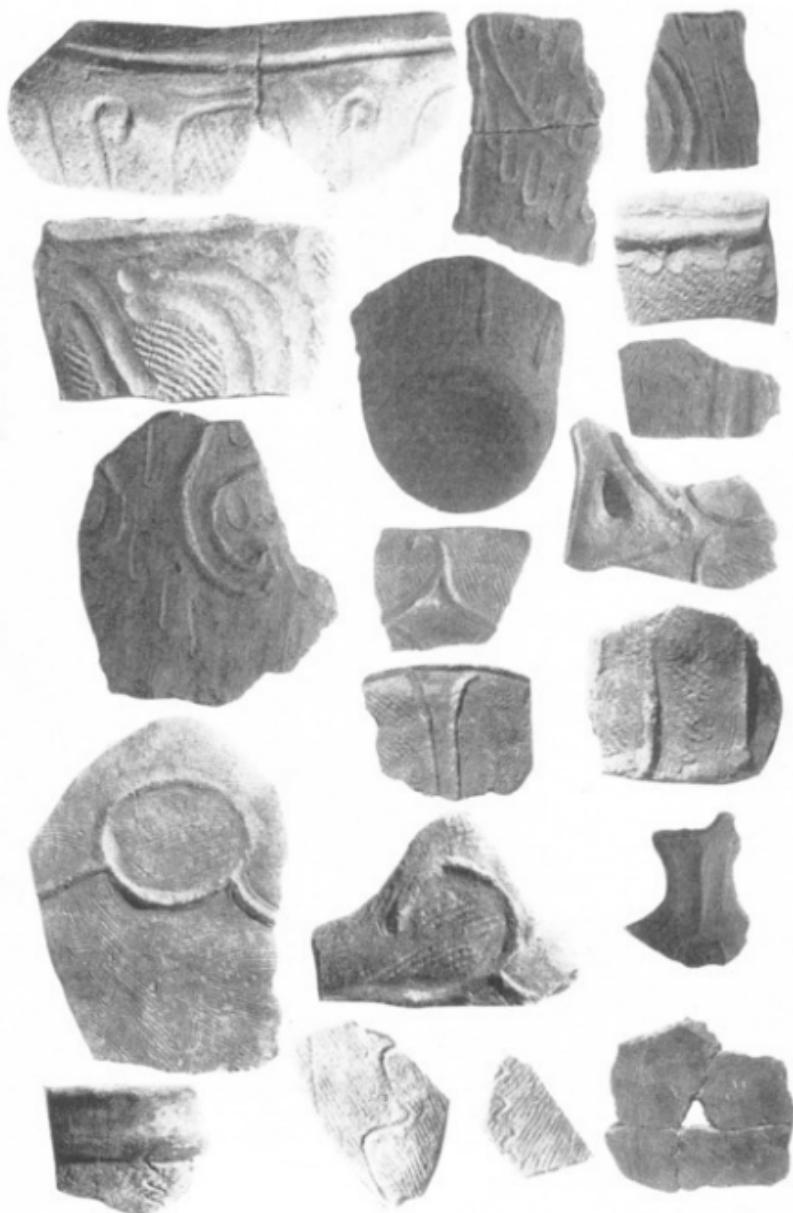


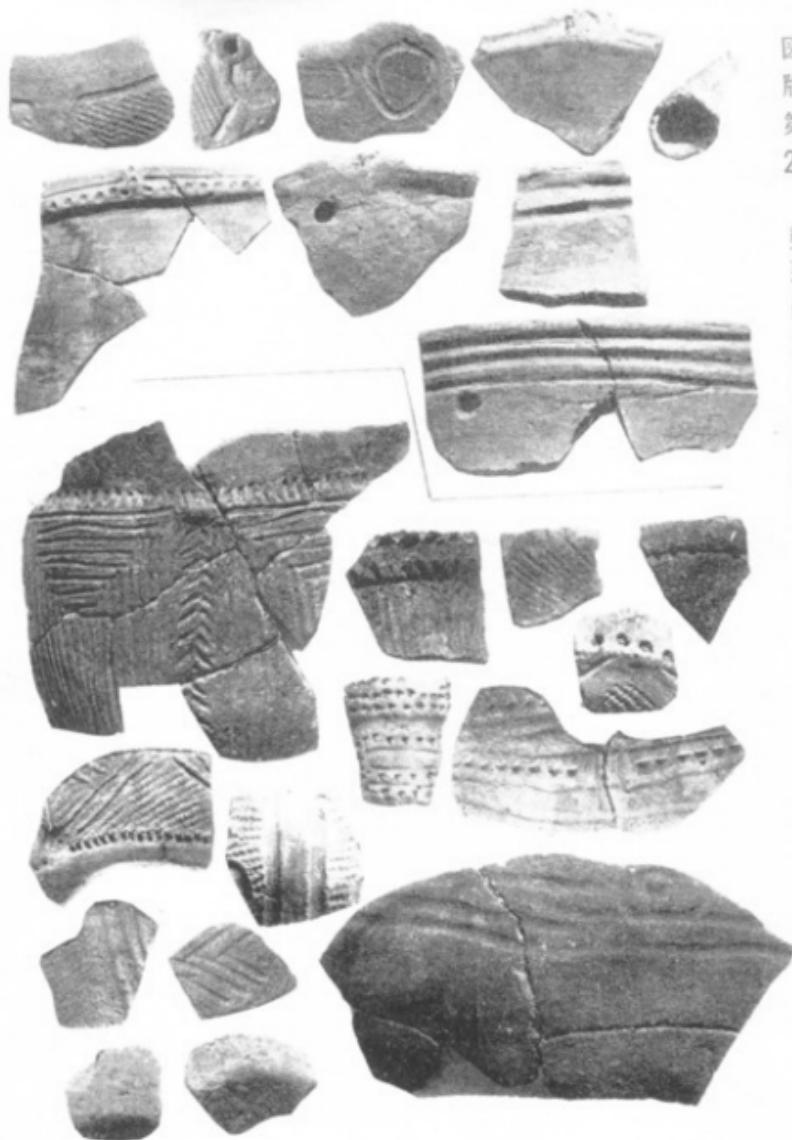












図版第23

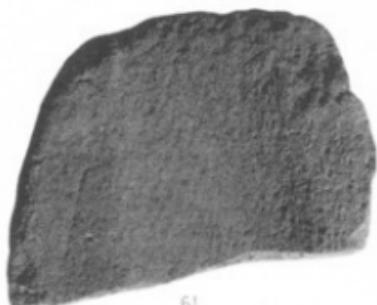
石骨(その1) 打製石斧・磨製石斧・石匙・石鏃

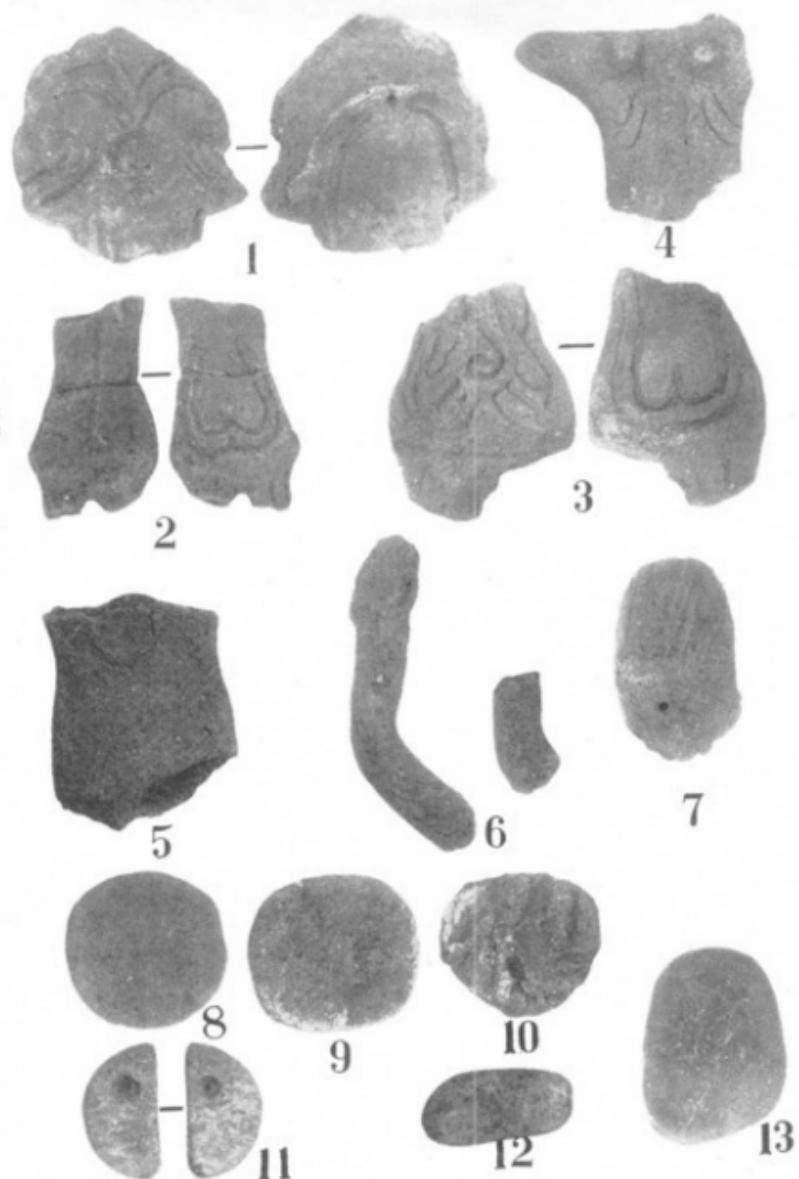


図版第24 石器(その2)



- 1~6 鋸用長方形型
7~11 鋸用不整形型
12~21 磨石兼用型
30 大型凹石
22~36 橢円形赤色龍骨化
した凹石
37~48 磨石専用型
49~57 小型磨石
58~59 石棒
60 磁石
61~62 石皿





水槽（なら）の実炭化物（4倍大）



水ならの実炭化物（4倍大）

長野県東筑摩郡波田村麻神造跡

第2次緊急発掘調査報告書

昭和48年3月31日

著者 藤沢宗平他

発行者 長野県中信農業水利改良事務所

長野県東筑摩郡波田村教育委員会

印刷所 松本市巾上4番24号

信州印刷株式会社

(非売品)